

平成18・19年度

秋里遺跡

一般国道53号秋里電線共同溝に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

財団法人 鳥取市文化財団

平成18・19年度

秋里遺跡

一般国道53号秋里電線共同溝に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

財団法人 鳥取市文化財団

序

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、平成16年の合併によって山陰地方最大の都市としてさらに展開中の、人口20万人余りを擁する地方都市です。

鳥取市内には、河川による平野部、その周辺の丘陵上、砂丘地等に数多くの遺跡が存在していますが、これらの埋蔵文化財は「国、地域の豊かな歴史と文化を生き生きと物語る国民の共有財産で、国や地域の誇りと愛着をもたらす精神的拠り所、地域の歴史的・文化的環境を形作る重要な資産」です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した秋里遺跡の調査は、一般国道53号秋里電線共同溝の敷設に伴う発掘調査として平成18年8月から10月と、平成19年5・6月、平成20年1月に現地調査を実施しました。調査の結果、弥生時代から奈良・平安時代の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 山崎祥次

例 言

1. 本書は、一般国道53号秋里共同電線溝の敷設に伴って行った秋里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、国土交通省の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが平成18(2006)・19(2007)年度に現地調査を実施し、19年度にあわせて報告書を作成した。
3. 発掘調査を実施した秋里遺跡の所在地は、鳥取市秋里字藪ヶ土手、三嶋、村之下である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測・図面の作成は、調査員・補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行なった。また、出土遺物の整理および遺物実測・図面の作成は濱橋博子・下多みゆきを中心として行い、神谷伊鈴がこれを補佐した。
6. 本書の執筆・編集は、山田真宏が行い、神谷伊鈴がこれを補佐した。
7. 発掘調査工区名については、本体工事に伴ってつけられた工区名を現地調査でも便宜的に使用したが、本報告でもそのまま使用することとする。

例；AW28区、AW28北区、AE22南区……

8. 発掘調査から本書の作成にあたっては、次の方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。記して厚く感謝いたします。

国土交通省鳥取河川国道事務所	国土交通省鳥取国道維持出張所
鳥取市教育委員会文化財課	鳥取県埋蔵文化財センター秋里分室
やまこう建設株式会社	有限会社中原創建
八幡・ワークエイト経常建設共同企業体	タキヤマ建設株式会社

(順不同、敬称略)

凡 例

1. 本書に用いた方位は、第1・2図は座標北、その他は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 本書に使用した遺構等の略号および表示は次のとおりである。

SD	：溝状遺構
SK	：土坑
P	：ピット状遺構
3. 断面図の土色は『新版 標準土色帖』による。
4. 今回の調査によって出土した遺物は、調査年次、遺跡名、調査区名、遺構名、取り上げ年月日、遺物台帳登録番号を基本的に注記した。

(例：2006 秋里S. AW28 SD-01 2006.09.04 No64)

本文目次

序

例言・凡例

第1章 はじめに 1

　　I. 発掘調査に至る経緯と経過 1

　　II. 調査の組織・体制 1

第2章 遺跡の位置と環境 2

第3章 調査の結果 5

　　I. 調査位置と調査地の堆積状況 5

　　II. 検出遺構と遺物 6

〈平成18年度の調査〉

　　1) AW28区の調査 6

　　2) AW29区の調査 8

　　3) AW33区の調査 12

　　4) AW37区の調査 14

　　5) AW28北区の調査 19

　　6) AW29南区の調査 20

　　7) AW37南区の調査 23

　　8) AW29北区の調査 25

〈平成19年度の調査〉

　　9) AE22南区の調査 25

　　10) AW28南区の調査 32

〈平成17年度の立会調査〉 32

III. まとめにかえて 34

写真図版(PL 1 ~16)

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	3
第2図 調査地位置図・既往調査位置図	5
第3図 AW28区および同区内検出遺構実測図	7
第4図 AW28区断面実測図	8
第5図 AW28区出土遺物実測図	9
第6図 AW29区および同区内検出遺構実測図	10
第7図 AW29区断面実測図	11
第8図 AW29区出土遺物実測図	12
第9図 AW33区出土遺物実測図	12
第10図 AW33区および同区内検出遺構実測図	13
第11図 AW37区出土遺物実測図	14
第12図 AW37区および同区内検出遺構実測図(1)	15
第13図 AW37区および同区内検出遺構実測図(2)	16
第14図 AW28北区出土遺物実測図	17
第15図 AW28北区および同区内検出遺構実測図(1)	18
第16図 AW28北区内検出遺構実測図(2)	19
第17図 AW29南区および同区内検出遺構実測図	21
第18図 AW29南区出土遺物実測図	22
第19図 AW37南区および同区内検出遺構実測図	24
第20図 AW29北区および同区内検出遺構実測図	26
第21図 AW29北区出土遺物実測図	27
第22図 AE22南区および同区内検出遺構実測図	29・30
第23図 AE22南区出土遺物実測図	31
第24図 AW28南区実測図	33
第25図 平成17(2005)年度採取遺物実測図	34

写真図版目次

PL 1	1. 調査地周辺航空写真(平成5年撮影) 2. 調査地近景(北北東から) 3. AW28区 第1遺構面検出状況 (南から) 4. AW28区 SK-01(東から) 5. AW28区 SD-01(北から) 6. AW28区 西壁断面(北東から) 7. AW28区 中央横断ベルト下位断面 (北から)	PL 2	1. AW29区 第1遺構面検出状況 (南から) 2. AW29区 SK-01(北東から) 3. AW29区 P-01(東から) 4. AW29区 第1遺構面遺物検出状況 (北から) 5. AW29区 堀下後(北から) 6. AW29区 西壁上位断面(北東から) 7. AW29区 西壁下位断面(北東から) 8. AW29区 北壁断面(南から)
------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

PL 3	1. AW33区 第1遺構面検出状況 (西から)	PL 7	1. AW29南区 掘下状況(北から)
	2. AW33区 SK-01(南から)		2. AW29南区 P-01断面(北から)
	3. AW33区 掘下後(北から)		3. AW29南区 南側遺物出土状況 (東から)
	4. AW33区 中央南北断面(南西から)		4. AW29南区 北側遺物出土状況(1) (西から)
	5. AW37区 第1遺構面検出状況 (南から)		5. AW29南区 北側遺物出土状況(2) (西から)
	6. AW37区 P-01断面(東から)		6. AW29南区 北側遺物出土状況(3) (西から)
	7. AW37区 P-02断面(東から)		7. AW29南区 西壁断面(南東から)
	8. AW37区 第2遺構面検出状況 (北から)		8. AW29南区 北壁断面(南から)
PL 4	1. AW37区 P-03(東から)	PL 8	1. AW37南区 客土除去面状況 (南から)
	2. AW37区 第3遺構面検出状況 (北から)		2. AW37南区 噴砂跡検出状況(1) (東から)
	3. AW37区 P-04(北から)		3. AW37南区 噴砂跡検出状況(2) (東から)
	4. AW37区 第3遺構面下遺物出土状況(1)(北から)		4. AW37南区 掘下後(南から)
	5. AW37区 第3遺構面下遺物出土状況(2)(東から)		5. AW37南区 SK-01断面(西から)
	6. AW37区 第4遺構面検出状況 (西から)		6. AW37南区 西壁断面(南東から)
	7. AW37区 P-05断面(西から)		7. AW29北区 第1遺構面検出状況 (北から)
	8. AW37区 P-06断面(南西から)		8. AW29北区 P-01(東から)
PL 5	1. AW37区 P-07断面(北から)	PL 9	1. AW29北区 P-02断面(東から)
	2. AW37区 西壁断面(南東から)		2. AW29北区 P-03断面(西から)
	3. AW37区 北壁断面(南から)		3. AW29北区 P-04断面(西から)
	4. AW37区 南壁断面(北から)		4. AW29北区 第1遺構面遺物出土状況(西から)
	5. AW28北区 掘下状況(南から)		5. AW29北区 掘下後(北から)
	6. AW28北区 掘下状況(北から)		6. AW29北区 第1遺構面下遺物出土状況(1)(南から)
	7. AW28北区 SK-01断面(東から)		7. AW29北区 第1遺構面下遺物出土状況(2)(西から)
	8. AW28北区 SK-01(東から)		8. AW29北区 南壁断面(北から)
PL 6	1. AW28北区 SK-02、P-02断面 (東から)	PL 10	1. AE22南区 第1遺構面(客土除去面) 検出状況(南から)
	2. AW28北区 SK-02(東から)		2. AE22南区 第1遺構面(客土除去面) 検出状況(北から)
	3. AW28北区 SK-03断面(東から)		3. AE22南区 SK-01断面(南から)
	4. AW28北区 SK-03(東から)		4. AE22南区 SK-01(西から)
	5. AW28北区 SK-04断面 (西北西から)		5. AE22南区 P-01断面(南から)
	6. AW28北区 SK-04(南東から)		
	7. AW28北区 P-01断面(東から)		
	8. AW28北区 P-02(東から)		

	6 . AE22南区 第1遺構面下遺物出土 状況(北から) 7 . AE22南区 SK-02断面(南から) 8 . AE22南区 SK-02(西から)	7 . AW28南区 西壁断面(南東から) 8 . AW28南区 東西中央ベルト断面 (南南東から)
PL11	1 . AE22南区 P-02断面(北東から) 2 . AE22南区 P-03断面(東から) 3 . AE22南区 P-04断面(南西から) 4 . AE22南区 P-05断面(南から) 5 . AE22南区 第2遺構面検出状況 (北から) 6 . AE22南区 第1遺構面下遺物出土 状況(北西から) 7 . AE22南区 掘下後(北北東から) 8 . AE22南区 掘下後遺物出土状況 (1)(東から)	PL13 調査地内出土遺物(1) ①AW28区 出土遺物(第5図-1~5、 7、9) ②AW29区 出土遺物(第8図-2~7) ③AW33区 出土遺物(第9図-1~3) ④AW37区 出土遺物(1)(第11図-1、2) PL14 調査地内出土遺物(2) ①AW37区 出土遺物(2)(第11図-3~8) ②AW28北区 出土遺物(第14図-1~ 4) ③AW29南区 出土遺物(1)(第18図- ~3、5~8、10)
PL12	1 . AE22南区 掘下後遺物出土状況 (2)(東から) 2 . AE22南区 西壁断面(1) (南東から) 3 . AE22南区 西壁断面(2) (南東から) 4 . AE22南区 北壁断面(南から) 5 . AW28南区 掘下状況(南南東から) 6 . AW28南区 掘下状況 (北北西から)	PL15 調査地内出土遺物(3) ①AW29南区 出土遺物(2)(第18図-11 ~14) ②AW29北区 出土遺物(第21図-1、2、 4~9)
		PL16 調査地内出土遺物(4) ①AE22南区 出土遺物(第23図-1~12) ②AE29地点 出土遺物(第25図-1、5) ③AE24地点 出土遺物(第25図-2~4)

第1章 はじめに

I. 発掘調査に至る経緯と経過

秋里遺跡は鳥取市秋里および江津に所在し、鳥取平野の中央を北流する千代川下流域に形成された自然堤防上に立地する。現在は昭和初期の千代川大改修の結果その東岸に位置するが、もともとは大きく蛇行する西岸に形成されたものである。

この秋里遺跡は昭和49(1974)年の河川改修および国道9号バイパス橋梁新設工事中に発見され、同年の発掘調査で多量の土器等が出土し広く周知されることとなった遺跡である。遺跡地周辺では、その後河川改修や区画整理事業、病院その他の施設建設、道路や下水道建設、宅地開発等が行われ、それらに伴う発掘調査が数次にわたって実施されている。

今回実施した発掘調査は、一般国道53号秋里電線共同溝に係るものである。事業計画地は既設の国道53号(旧国道29号)の歩道および車道部分が該当しているが、事業実施中に土器片が出土したことから、国土交通省、鳥取県教育委員会および鳥取市教育委員会で協議が行われ、記録保存で対応することとなった。その結果、平成17年度は鳥取市教育委員会が現地立会調査を、平成18・19年度は国土交通省から委託を受けた財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが対象地内の発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、改めて国土交通省によって遺跡の遺存状況確認ならびに占用物件確認の試掘調査が行われ、その結果、平均して現道路面下1.5m程度まで後世の改変を受けていることが判明し、それらを基に調査範囲が決定された。その際、本体工事の関係で、永久構造物扱い部分(特殊部；AW28区、AW29区、AW33区、AW37区)については本遺跡の鍵層である無遺物層の青灰色粘土層あるいはその相当層まで確認し、そのほか(管路部；AW28北区・南区、AW29北区・南区、AW37南区、AE22南区)については工事によって喪失される工事床面およびその影響範囲まで確認調査することになった。なおこれまでの周辺調査から、最終遺構面が海拔標高0.5m以下となる可能性があり、かつ多量の湧水の可能性もあり、さらに国道地内であることなどから、調査地の周囲に鋼矢板や簡易矢板を打設し、必要に応じて毎日覆工板の開閉を行って調査を実施することとし、現道路面下1.5m程度までの客土については重機によって除去し、それ以下については、人力で基本的に層単位で掘削しそれぞれの面で精査を行うこととした。また調査は各種調整を行いながら、平成18年8月から10月まで特殊部のAW28区、AW29区、AW33区、AW37区、管路部のAW28北区、AW29南区、AW37南区、AW29北区の順に、さらに平成19年5月から6月まで管路部のAE22南区、20年1月にAW28南区を実施した。

調査の結果、各調査区で弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代のいずれかの時期に相当する1面～4面の遺構面や遺物包含層が検出された。遺構は、現代の搅乱を除いて、土坑10基、溝状遺構1条、ピット状遺構23基、土器溜り状遺構2ヶ所、噴砂跡3ヶ所である。遺物は、調査区で出土量の多寡はあるものの、総量19コンテナ程度出土している。国道直下の調査地で、占用物件の移設等の調整に多少の時間がかかったが、平成20年1月中旬に現地での調査を終了した。調査面積は合計191.02m²(のべ418.26m²)である。なお平成18年度は、現地調査と並行して記録類と出土遺物の整理を可能なところまで実施し、19年度は4月中旬～7月中旬および20年1月～3月に現地調査、整理作業、報告書作成作業をあわせて実施した。

II. 調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

[平成18(2006)年度]

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団

理 事 長 山崎祥次
副理事長 住田高市
調査指導 鳥取市教育委員会 文化財課
事 務 局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
所 長 前田 均
副 所 長 山田真宏
主 幹 谷口恭子
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
調査員 山田真宏
調査補助員 福田朋幸

[平成19(2007)年度]

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団
理 事 長 山崎祥次
副理事長 住田高市
調査指導 鳥取市教育委員会 文化財課
事 務 局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
所 長 前田 均
所長補佐 山田真宏
主 幹 谷口恭子
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター
調査員 山田真宏
調査補助員 濱橋博子
下多みゆき

第2章 遺跡の位置と環境

秋里遺跡は、鳥取平野中央を北流する千代川の下流域、鳥取市秋里、江津地区に所在する遺跡である。この千代川は中国山地に源を発し、袋川、野坂川、大路川など大小の支流を合流して一大水系を成している。鳥取平野はこの千代川の堆積作用によって形成された沖積平野で、その流域には段丘や自然堤防が見受けられる。人々はこれらの段丘や自然堤防、その後背湿地などを生活の場として古くから利用している。下流路がほぼ直線的に日本海に注ぐ現在の千代川は、大正7年の災害を契機として昭和初期(1926~1931年)にかけて改修されたものであるが、それ以前は西品治地区の北あたりから大きく東に湾曲し、浜坂地区あたりから西に蛇行して海に至る流路であった。現在は地番が千代川の左岸と右岸に二分される秋里地区であるが、そこから名前をいただいた秋里遺跡は、このような旧千代川の蛇行によって形成された東側に張り出す旧左岸自然堤防上に立地する。遺跡地一帯の標高は3.5m前後を測り、以前は鳥取市民へ農作物を供給する一大農地等として利用されてきた。しかしながら近年、特に1980年代以降は道路網や病院の整備事業を契機として、さらに区画整理事業の実施もあり急速に変貌を遂げる地帶となっている。

このような位置に所在する秋里遺跡は、昭和49年(1974)に実施された一般国道9号改築工事に伴って多量の土師器片が発見されたことでその存在が確認された遺跡である。当初は土師器片とともに舟や水鳥、土馬といった土製品、ミニチュア土器、鏡形石製品などの特殊な遺物が出土したことから祭祀的性格を持つ遺跡として位置づけられたが、発見以来の二十数次に亘る調査の実施によって、現在では弥生

第1図 調査地周辺遺跡分布図



A. 會見古墳群
B. 佐見古墳群
C. 布勢觀音塚古墳群
D. 里仁古墳群
E. 渔間古墳群
F. 鶴屋古墳群
G. 古海古墳群
H. 鈎山古墳群
I. 雁金山古墳群
J. 覚寺古墳群
K. 開地谷古墳群
L. 石塚山古墳群
M. 足山古墳群



時代から中世にかけての集落遺跡の複合遺跡であることが明らかになりつつある。以下、秋里遺跡を含めた鳥取平野周辺の遺跡の概略を追ってみたい。

鳥取平野において人々の生活の痕跡を求めるに、浜坂地内の砂丘から出土した黒曜石製の有舌尖頭器が旧石器時代にまで遡る可能性を持つものとして知られている。ただこれは採集遺物で詳細は不明なため明確な同時代の遺跡とすることは判断を後に送り、今後の発見・調査・研究に留意したい。

続く縄文時代の遺跡としては、まず前期の福部町栗谷遺跡が上げられる。砂丘後背湿地に立地し後期まで継続する。やや遅れて桂見遺跡が現れるが、これは現在のところ後期を主体とするとみられている。中期になると砂丘地に栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡が認められるが、いずれも中期の域にとどまり、中期末頃から後期に向けた低湿地遺跡群とされる桂見遺跡、東桂見遺跡、布勢第1遺跡が始動する。後期も後半になると遺跡が自然堤防上に進出し、晩期にはその傾向がさらに進展する。このような遺跡としては山ヶ鼻遺跡、古海遺跡、大柄遺跡があり、そのほかに帆城遺跡、湖山第2遺跡、岩吉遺跡、里仁遺跡等から後期・晩期の遺物が出土している。

弥生時代前期になると、縄文時代晩期からの遺跡が継続するが、前期の遺物を断片的に出土するにとどまり、その実態の究明は今後の研究課題である。中期・後期の遺跡としては、上述遺跡のほかに西桂見遺跡、秋里遺跡など多くの遺跡が加わることとなる。このうち、中期の拠点集落とみられる自然堤防上に形成された岩吉遺跡には稻作が導入され、これがのちに周辺の帆城、天神山、大柄、古海、服部等の遺跡に波及していくものと考えられている。またこの地域の弥生集落の特徴として玉作り関連遺物の出土も知られており、帆城遺跡、岩吉遺跡、秋里遺跡から報告がなされている。さらに青島遺跡、塞ノ谷遺跡、秋里遺跡等はその出土遺物から祭祀的要素の強い遺跡とされている。こうしてこれらの遺跡が古墳時代へと引き継がれていくこととなるが、この時期の湖山池南東岸丘陵上に営まれる布勢鶴指奥や桂見、西桂見等の墳墓の数々も、その配置状況や規模、立地状況等、古墳時代に続く社会構造を考える上で重要なものとなっている。

古墳時代に入ると、前期には湖山池周辺の丘陵上に弥生時代の系譜を引くとみられる小規模な方墳が営まれ、中期・後期になると全長92mの楕円1号墳をはじめとして、里仁29号墳(81m)、布勢1号墳(59m)、古海36号墳(67m)、大熊段1号墳(51m)、三浦1号墳(36m)などの大小様々な前方後円(方)墳が平野周辺丘陵上に造営されるが、基本的に後期には古墳規模に縮小傾向が見られる。秋里遺跡周辺の丘陵上でも古墳は営まれており、開地谷古墳群、雁金山古墳群、浜坂横穴群等が知られている。また古墳時代の集落遺跡については、その多くは弥生時代の集落に重なって形成されているよう、岩吉遺跡、湖山第2遺跡、大柄遺跡、秋里遺跡等がそれにあたる。その他の弥生時代に丘陵上にみられた住居については、古墳時代に入ると丘陵斜面に下りていく傾向が窺え、これらは丘陵を後背とする裾の微高地上に現集落と重なって営まれたものと推測されている。

歴史時代の遺跡の調査事例はそれ以前の時代のものに比べて少ないが、千代川右岸では、古市遺跡から7世紀後半～平安時代の掘立柱建物跡が検出されるとともに奈良三彩、墨書き土器等の遺物が出土したほか、円護寺坂ノ下遺跡から13世紀頃の鍛冶炉や掘立柱建物跡が検出されている。また左岸では、岩吉遺跡から平安時代の遺構や流路から多量の墨書き土器や木簡類、人形等が検出されている。さらに菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡から奈良・平安時代の遺構、遺物が検出されるとともに、菖蒲廃寺跡の遺存や古代山陰道の付近通過の推定等とあわせて、これらの遺跡周辺が律令期に重要な位置を占めていたものと考えられている。時期は下るが、14世紀半ばには因幡守護に山名氏が任じられ、15世紀には守護所が布施に移されるとともに布施天神山城が築かれ、鳥取城へ移るまでの約100年間湖山池東岸が因幡支配の拠点となつたことが知られている。近年の調査でも遺構、遺物が検出され、少しづつではあるが情報の蓄積が進み始めている。なお今回の調査遺跡である秋里遺跡でも、これまでの発掘調査や文献資料から、中世以降の集落の存在や生活の一端も徐々にではあるが知られつつある。

第3章 調査の結果

I. 調査位置と調査地の堆積状況(第2・4・7・10・13・15・17・19・20・22・24図)

調査対象範囲は、岡山市と鳥取市を結ぶ一般国道53号の終点となる国道9号との立体交差部分から、今回の工事予定範囲内での秋里遺跡の境界とされている狐川までの250mほどの国道53号直下に位置する。各調査区は、前述のとおり、遺跡の遺存状況と工事の性格等をふまえた協議によって国道の西側(下り線)車道・歩道部分(AW工区)と東側(上り線)車道・歩道部分(AE工区)の計10ヶ所が決定された。

対象範囲の堆積状況は、標高3~3.5m程度の道路面から標高1.5~2m付近の厚さ約1.5mは道路およびその基礎部分の客土である。客土中からその下には主に公共の占用物件による搅乱が所々に見られる。基本的にその下は純粋な堆積層とみられ、遺跡の上位層は喪失しているものの、下位層は遺存しているものと考えられた。

南北約250mの間に点在する各調査区間でみると、同質の堆積層の間に高低差が認められるが、大き



第2図 調査地位置図・既往調査位置図

くみると標高1.5~0.0m付近に灰褐色・灰黄褐色・暗褐色の粘質土層が堆積する。その下の標高1.0~-0.5m付近にはオリーブ黒色・灰オリーブ・暗オリーブ灰色の粘土層が堆積し、さらに下の標高-0.5m程度以下は基盤(相当)層とみられる暗青灰色砂層となる。これを見る限り、調査対象範囲中程のAW29~33区付近がその南のAW28区付近より1m程度、北のAW37区付近より0.5m程度オリーブ系粘土層が盛上の様子がうかがえる。

遺構は各調査区の客土除去面およびその下の灰褐色・灰黄褐色・暗褐色粘質土層のいずれかの層の上面および灰オリーブ粘土層上面から検出した。遺物は主に各遺構面の上層から出土しているが、暗褐色粘質土層中から古墳時代のものが比較的多く出土している。

II. 検出遺構と遺物

今回の調査では各調査区で1~4面の遺構面と遺物包含層が検出された。検出遺構の総数は、土坑10基、溝状遺構1条、ピット状遺構23基、土器溜り状遺構2ヶ所、噴砂跡3ヶ所を数える。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、鉄器、石器があり、弥生時代後期から古墳時代前期・中期を中心として、僅かに奈良・平安時代のものが出土している。また、今回の調査に先立つ平成17年度の鳥取市教育委員会の立会調査では、遺物包含層から、弥生土器、土師器が出土しており、あわせて総量は54×34×20cmのサイズのコンテナ約19箱分である。

〈平成18年度の調査〉

1) AW28区の調査(第3~5図、PL. 1・13)

調査対象範囲南端近くで、狐川から15m程度北西の国道53号西側車道・歩道部分に位置する。第10層(灰褐色粘質土)上面と第18層(褐色粘質土)上面が遺構面で、前者(第1遺構面:標高約1.3m)から土坑1基(SK-01)、後者(第2遺構面:標高約0.6m)から溝状遺構1条(SD-01)を検出した。また本調査区内では遺構は検出していないものの、客土除去面(標高約1.9m)は後述の隣接するAW29北区では遺構面である。なお、調査面積は14.47m²である。

SK-01(第3・5図、PL. 1・13)

調査区北端近くで検出した。当初の下水管埋設時搅乱部上からのサブトレーナーで北側が不明瞭となつたが、平面形は橢円形になると思われ、主軸はN-1°-W程度とみられる。断面は逆台形状で、規模は遺存長で、(0.52)×0.49m、検出面からの深さ0.23mを測る。埋土は炭化物を含む灰褐色粘質土で、中から甕(1)が検出された。

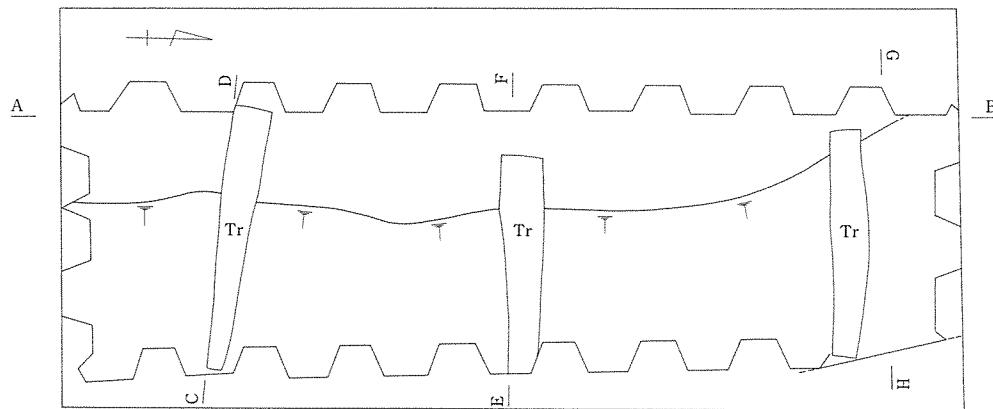
SD-01(第3・5図、PL. 1)

調査区中央から南側にかけて調査区を東西に横断する形で検出した。主軸はN-71°-E程度にとるものとみられる。湧水と鋼矢板の強度の関係で矢板まで掘りきれなかつたが、検出長2m以上、同幅2.8m以上、深さ1mである。埋土は粘質土・粘土・砂の5層に分かれ自然木片や土器が出土している。土器のうち、土師器、須恵器の甕(2~4)を図化した。(2)はやや外反する複合口縁で、下端部の稜はやや鋭さに欠ける。(3)はくの字状口縁である。須恵器甕(4)には口縁部凸帯も波状文も認められない。

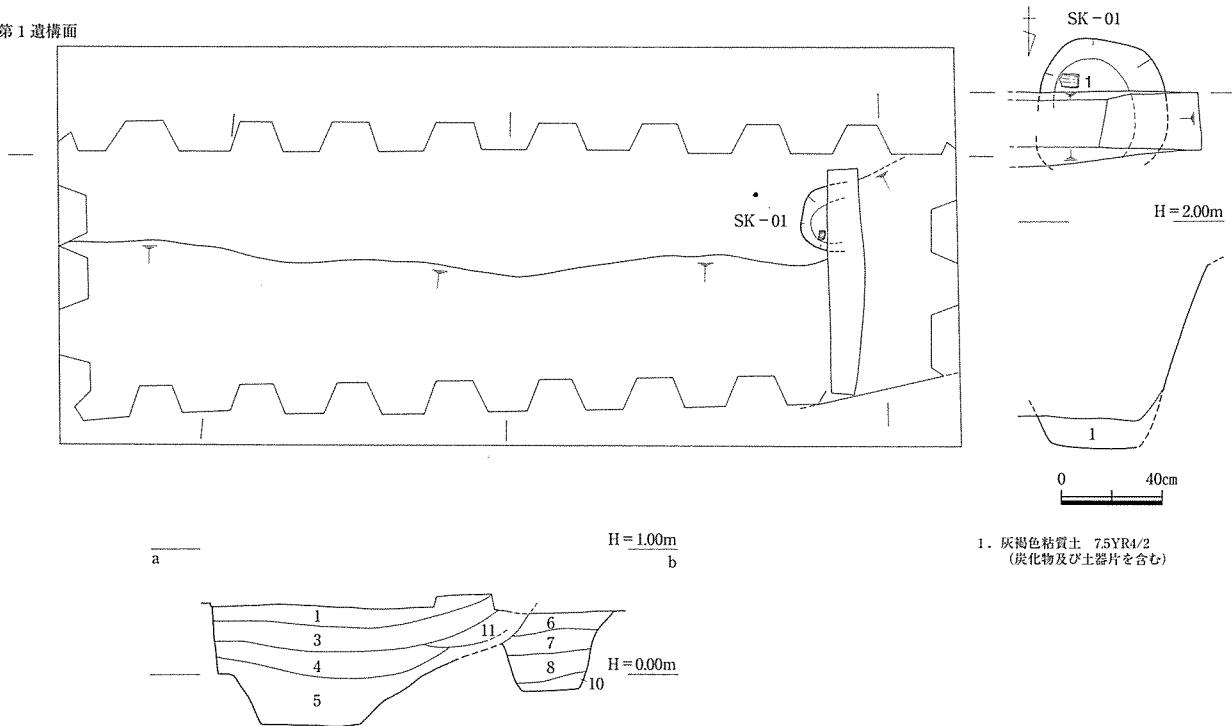
遺構外出土遺物(第5図、PL. 13)

各遺物包含層のうち、第10~16層から弥生時代後期から古墳時代前期・中期の、第8・9層から古墳時代から奈良・平安時代の遺物が出土しており、(5)~(9)を図化した。(5)は第12層出土の甕で、口縁端面に3~4条の沈線が施され、外面口縁部から頸部に煤が認められる。有段高杯(7)と端部が内面に肥厚するくの字状の甕口縁部(6)は第11層の出土である。内外面赤彩で外面にタタキ目痕の残る杯(8)は第12~14層出土で、重ね焼き痕の残る須恵器蓋(9)は第8~9層の出土である。

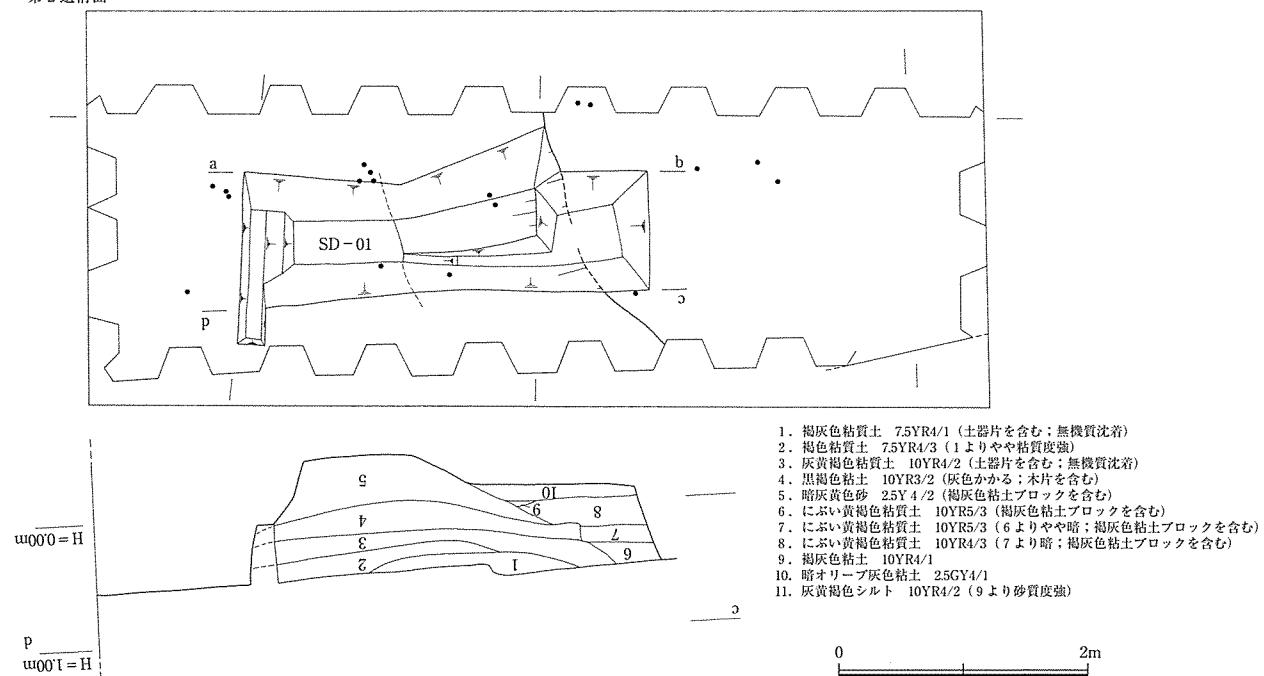
容土除去面



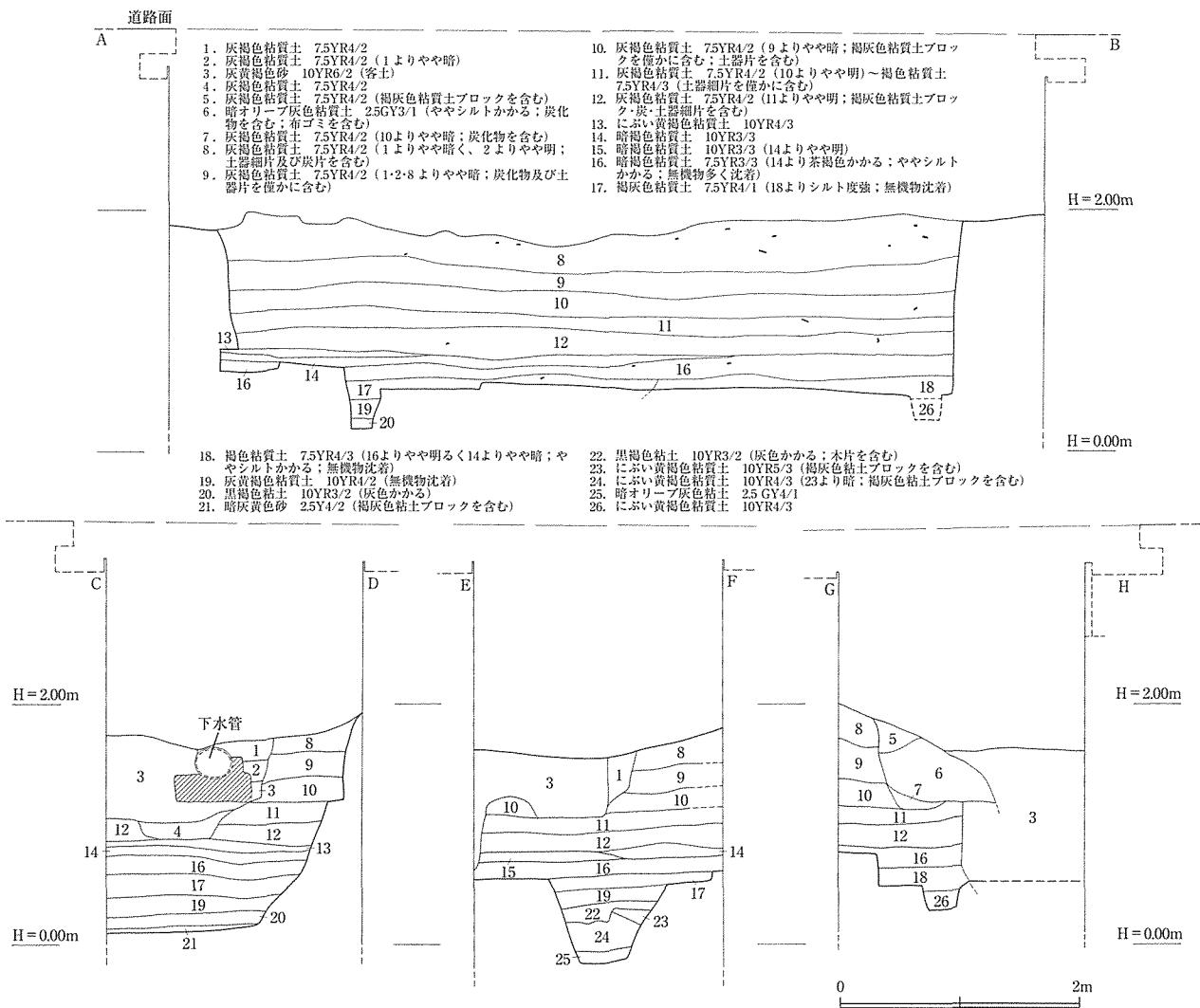
第1遺構面



第2遺構面



第3図 AW28区および同区内検出遺構実測図



第4図 AW28区断面実測図

2) AW29区の調査(第6～8図、PL. 2・13)

AW28区の北約60mで、国道の西側車道部分に位置する。客土除去面(第1層<灰褐色粘質土>上面)と第7層(灰オリーブ粘土)上面が遺構面で、前者(第1遺構面：標高約1.55m)から土坑1基(SK-01)とピット状遺構1基(P-01)、後者(第2遺構面：標高約0.5m)からピット状遺構1基(P-02)を検出した。調査面積は17.83m²である。

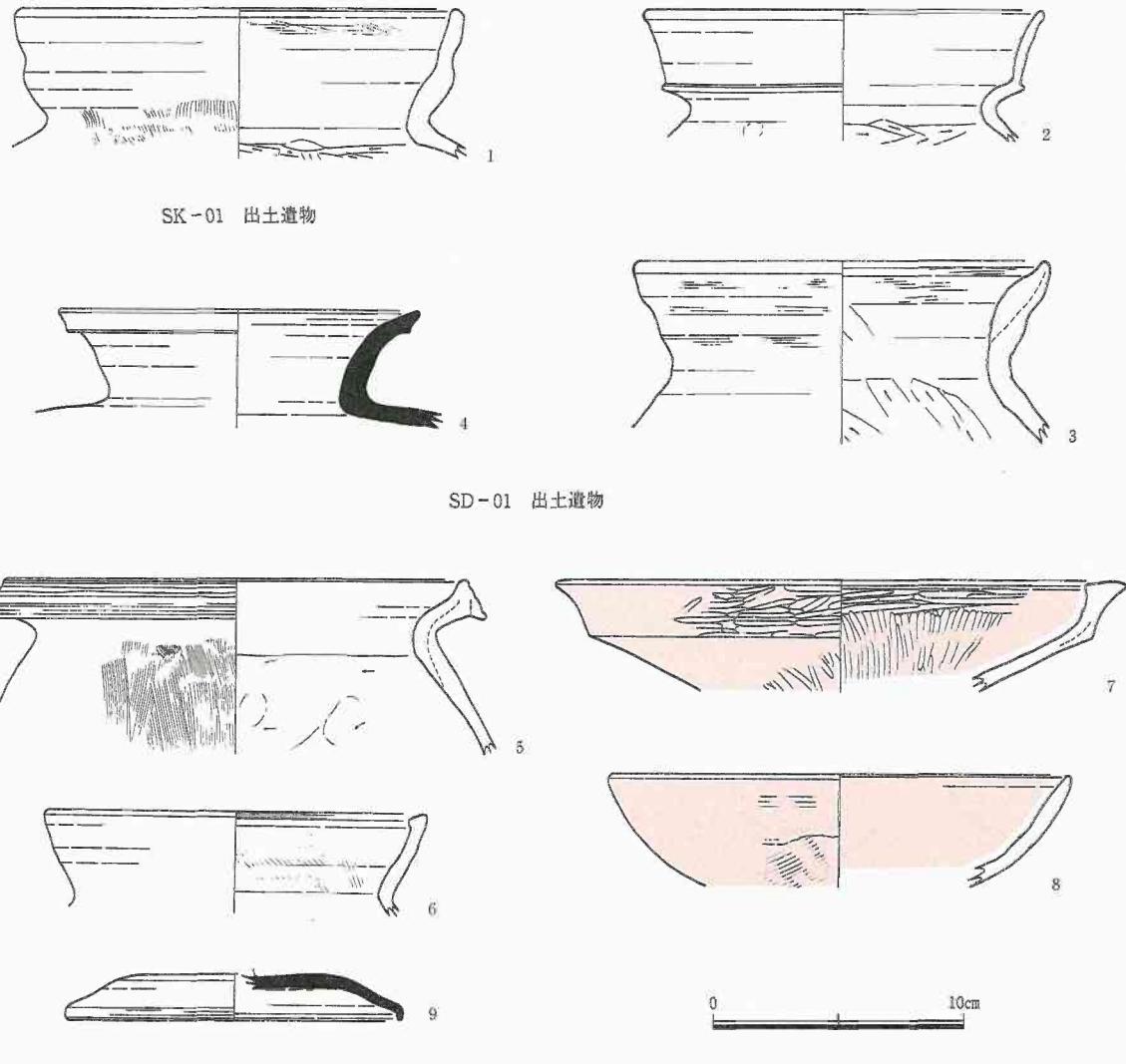
SK-01(第6図、PL. 2)

調査区南端部から検出した。南側が調査区外のため全体の規模や形状は不明であるが、検出した北側の状況から隅丸の長方形状の可能性も考えられる。主軸は、N-88°-W程度か。規模は、遺存長で、東西2.2m、南北0.74m、深さ0.07mを測る。埋土は炭化物を含む灰褐色粘質土で、赤彩高杯部片(第8図-6)等が検出された。

P-01、02(第6図、PL. 2)

P-01は第1遺構面の調査区北西端部から検出した。国道敷設時等の搅乱によって上位が喪失しているものと考えられるが、長径0.23m、短径0.22m、検出面からの深さ0.37mを測る。埋土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土で、上位から土器器体部片が出土しているが図化には至らなかった。

P-02は第2遺構面の南端部から検出した。長径0.21m、短径0.19m、検出面からの深さ0.25mを測るが、調査区南壁法面からの検出で、あるいは上位のオリーブ黒色粘土層(第6層)からの掘り込みの可能



第5図 AW28区出土遺物実測図

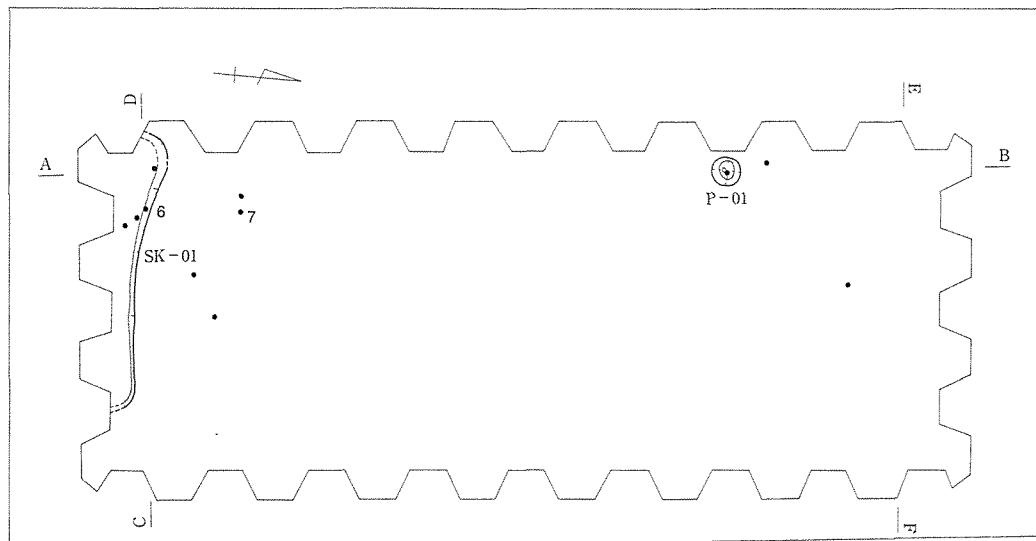
性も残る。埋土はオリーブ黒色粘土である。遺物は検出されなかった。

なお本調査区検出のピット状遺構は、いずれも明確に柱痕を確認できるものではなく、また調査範囲内におけるそれぞれの検出面での位置関係を見ても施設を構成するものではないと考えられる。

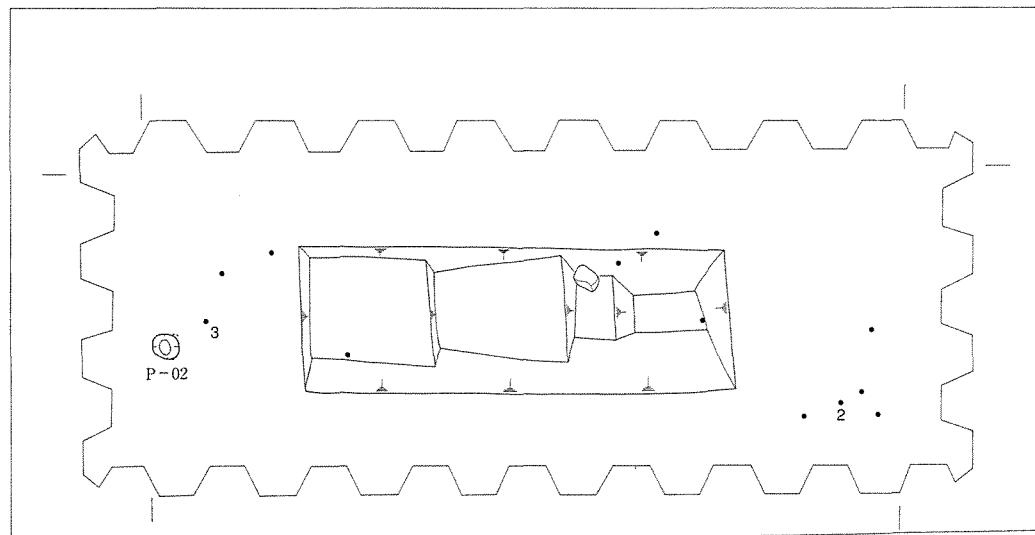
遺構外出土遺物（第8図、PL. 13）

各遺物包含層のうち、第4・5層境界付近から弥生時代後期の、第2・3層から弥生時代後期から古墳時代前期・中期の遺物が出土しており、(1)～(5)、(7)を図化した。このうち、(1)は第3層出土の口縁部片で、端面に3条の沈線が施される。外面に煤が付着する。第4層と第5層の境界付近出土の平底(2)も外面に煤が付着する。(3)(4)(5)(7)は第2・3層の出土遺物で、複合口縁(3)は下位にややあくなつた稜を持つ。(4)は鼓形器台の受部であるが、剥落が著しく調整は不明瞭である。(5)は高杯の杯部で、内面に放射状の暗文が施される。脚部(7)は内外面とも横ナデ調整がなされる。

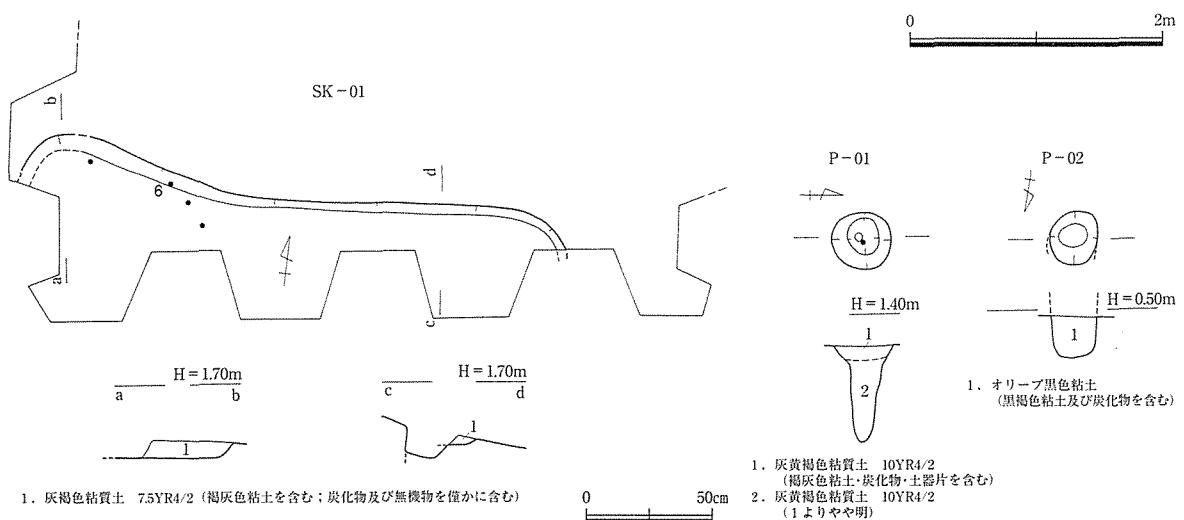
第1 遺構面



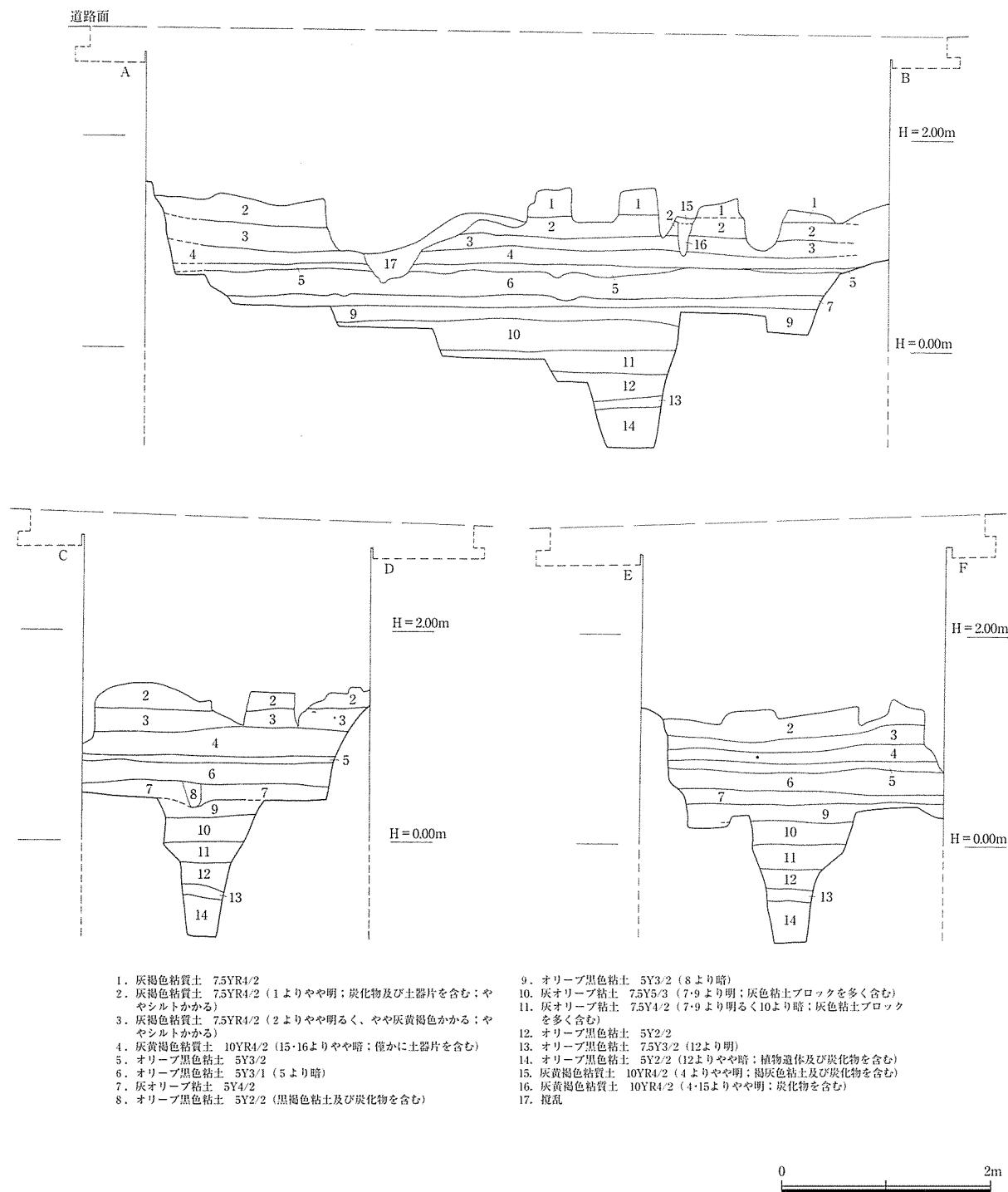
第2 遺構面



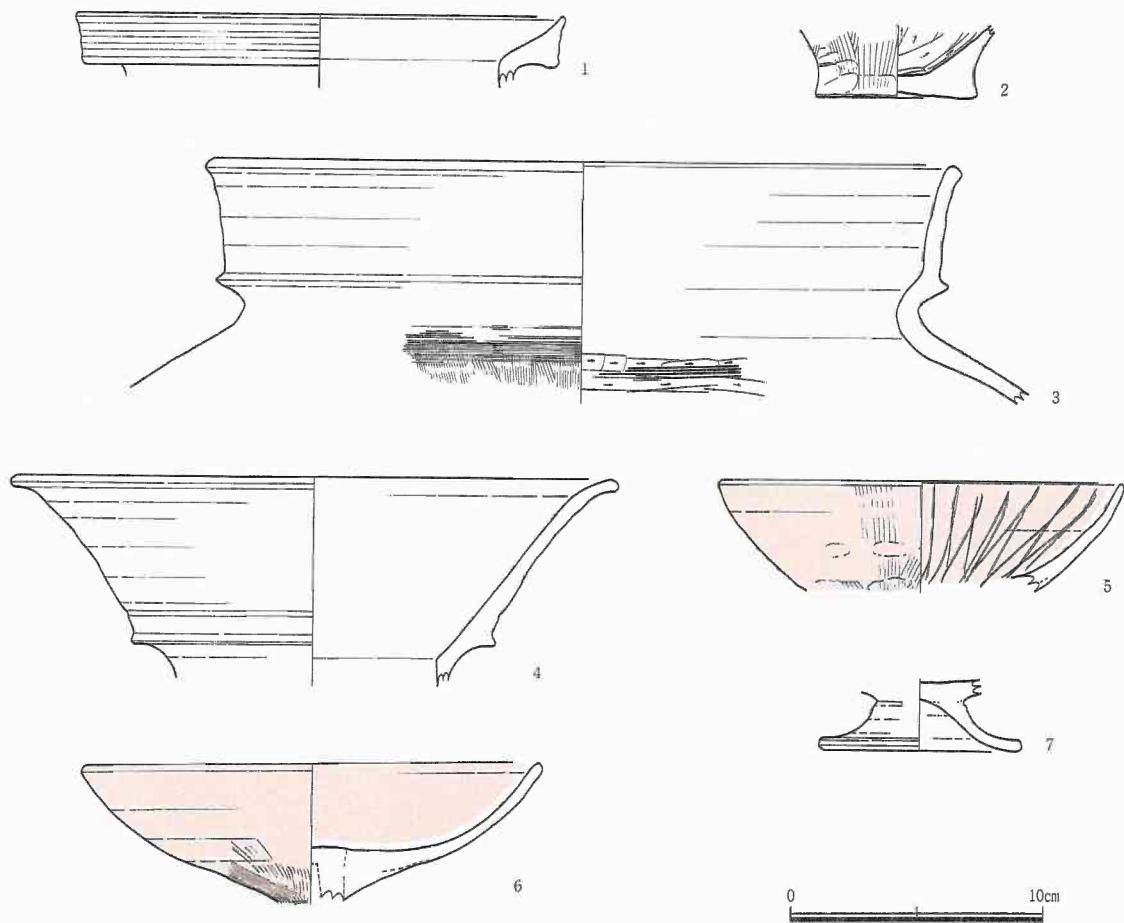
0 2m



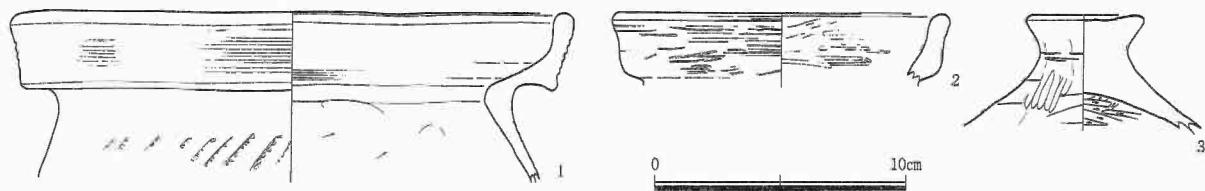
第6図 AW29区および同区内検出遺構実測図



第7図 AW29区断面実測図



第8図 AW29区出土遺物実測図



第9図 AW33区出土遺物実測図

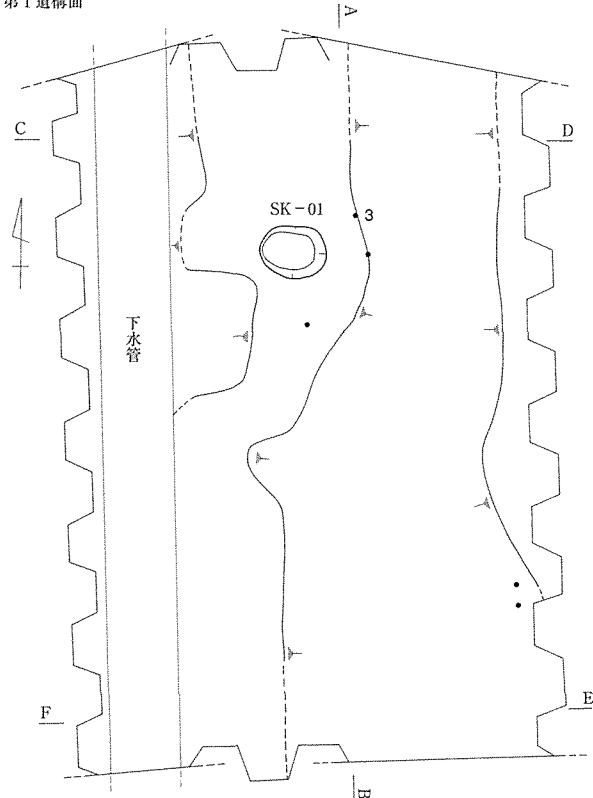
3) AW33区の調査(第9・10図、PL. 3・13)

調査対象範囲中央よりやや北寄りで、AW29の北約70mの国道西側車道・歩道部に位置する。各種搅乱のため第4層(灰黄褐色粘質土)か第5層(灰褐色粘質土)のいずれかは明瞭ではないものの、客土除去面が遺構面(第1遺構面:標高約1.15m)で、土坑1基(SK-01)を検出した。また本調査区では遺構は検出していないものの第1遺構面下からの僅かながらとは言え遺物の出土やAW29付近の堆積状況との比較から、標高0.5m付近のオリーブ系粘土層付近に別の遺構面の存在する可能性も考えられる。調査面積は20.37m²である。

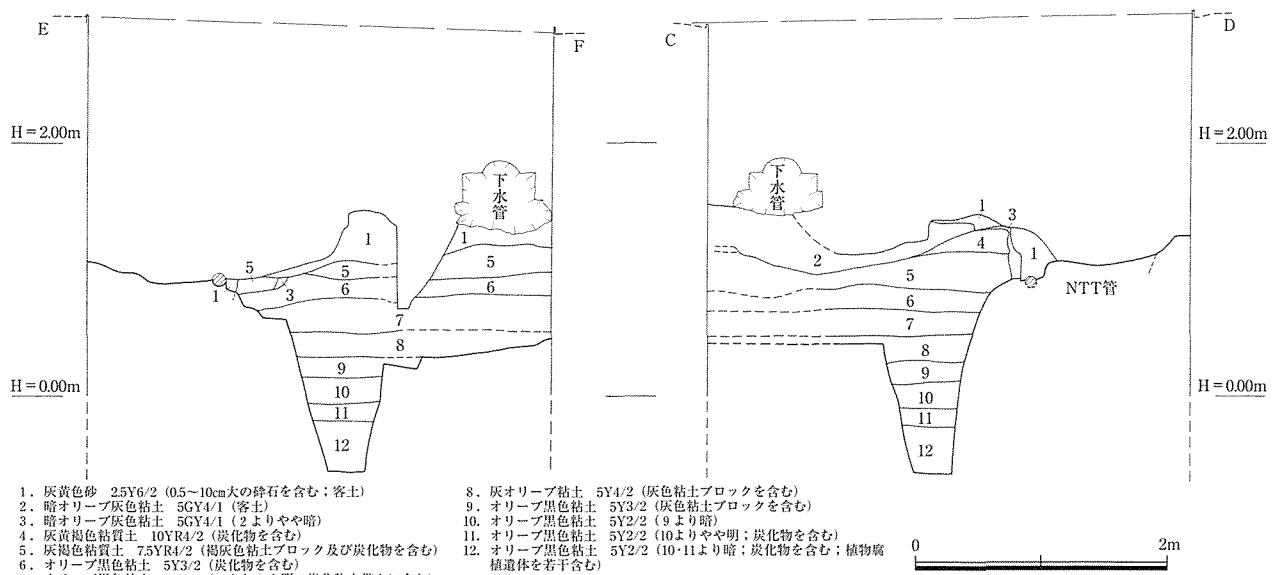
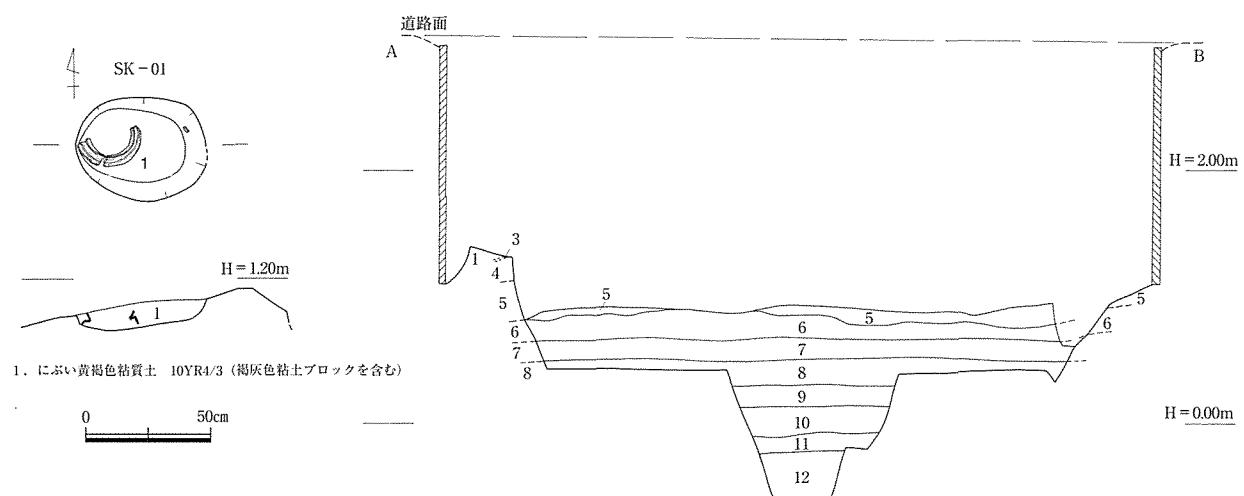
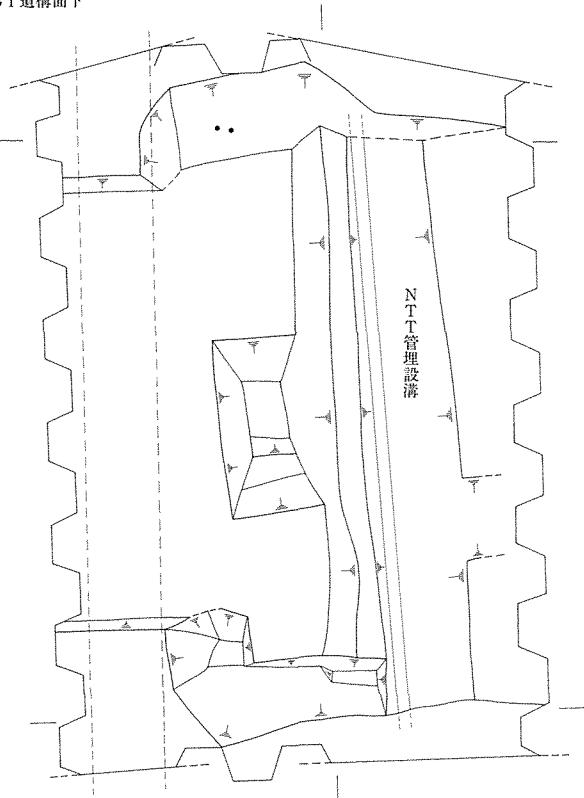
SK-01(第9・10図、PL. 3・13)

調査区中央よりやや北寄りから検出した。搅乱によりその上位は喪失しているものとみられるが、平面形は橢円形で主軸をN-81°-W程度に取る。断面は皿状である。規模は長径0.52m、短径0.41m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土から甕口縁部(1)と土師器細片が検出された。このうち図化した(1)は、口縁部外面に6~7条の櫛描平行沈線が施されるとともに、その同一工具によるものとみられる連続刺突文状の工具痕が肩部に認められる。

第1 遺構面



第1 遺構面下



第10図 AW33区および同区内検出遺構実測図

遺構外出土遺物（第9図、PL. 13）

遺物は、少量ではあるが包含層である第4～6層から弥生時代後期～古墳時代とみられる遺物が出土しており、(2)(3)を図化した。甕口縁部(2)はSK-01より下位の第4層出土で、外面軽い櫛描沈線のちヘラミガキのち軽いナデ、内面粗なヘラミガキ調整がなされる。また第4層と5層の境界付近出土の蓋(3)は、口縁部がハの字状に開き、外面ナデ、ヘラミガキ、内面ヘラ削りされる。外面には煤が付着している。

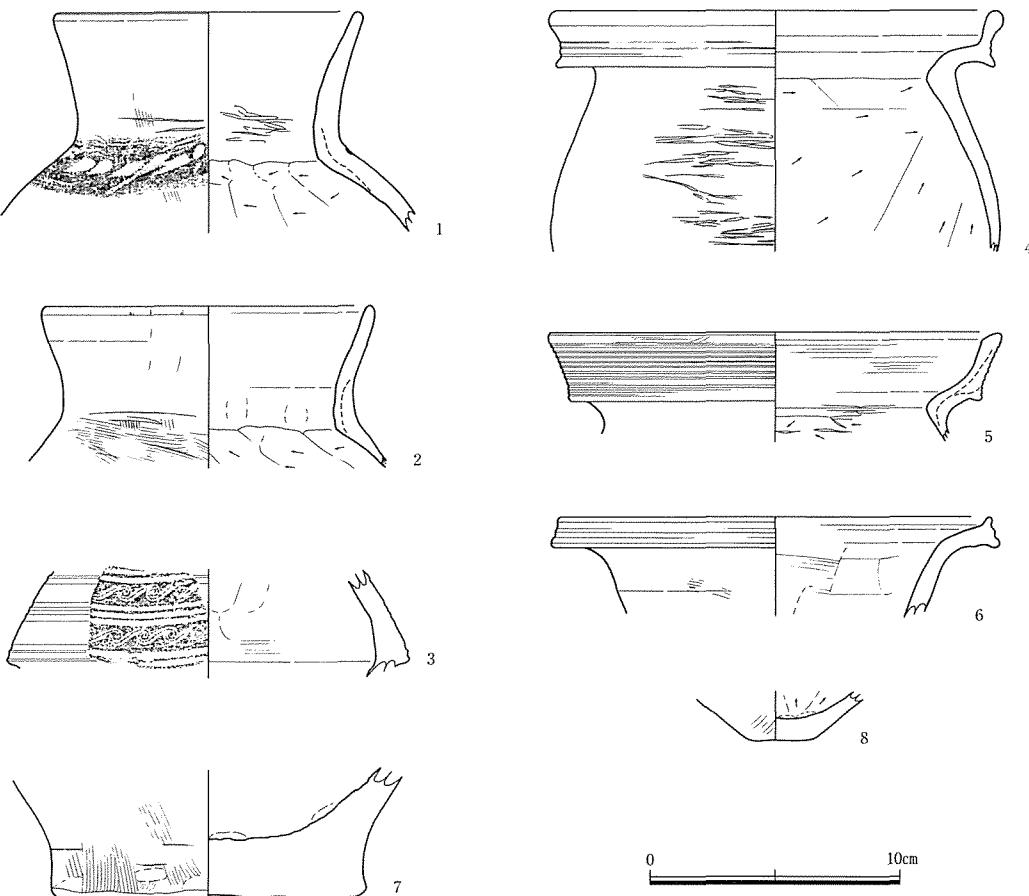
4) AW37区の調査(第11～13図、PL. 3・4・13・14)

調査対象範囲北端部付近で、国道9号との交点から30m程度南の国道53号西側車道・歩道部分に位置する。搅乱のため灰黄褐色粘質土層の第2層か3層のいずれかは明瞭ではないが、標高1.15m付近の客土除去面が第1遺構面となる。以下、第5層(灰黄褐色粘質土)上面(第2遺構面：標高0.8m前後)、第6層(暗褐色粘質土)上面(第3遺構面：標高0.6m前後)、第13・14層(オリーブ黒色粘土)上面(第4遺構面：標高0.3m前後)が遺構検出面で、今回の調査範囲の中では最も多く遺構面が検出された。検出遺構はいずれもピット状遺構で、第1遺構面から2基(P-01、02)、第2遺構面から1基(P-03)、第3遺構面から1基(P-04)、第4遺構面から3基(P-05～07)の合計7基である。なお、調査面積は18.50m²である。

P-01～07 (第12・13図、PL. 3～5)

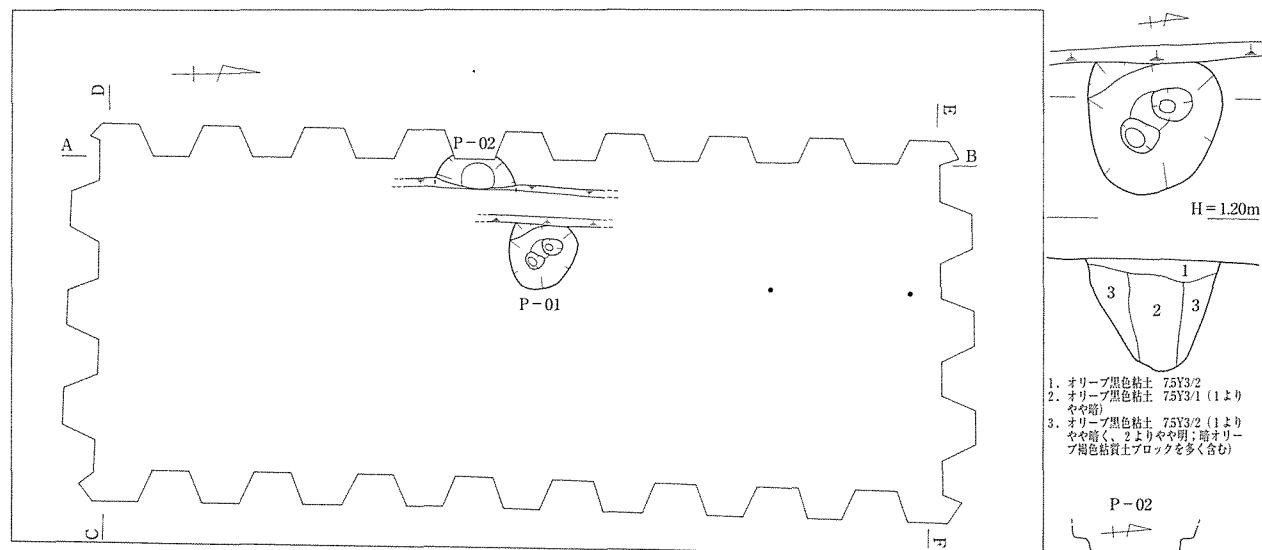
P-01は、調査区中央よりやや西寄りから検出した。部分的に排水用の溝に切られ不明瞭な点もあるが、長径0.58m、短径0.51m程度、検出面からの深さ0.44mを測る。平面形は橢円形で、中段から北西側と南西側に二段に掘り込まれる。オリーブ黒色の埋土は3層に分けられるが、遺物は出土しなかった。

P-02はP-01の南西に近接して検出された。西端が調査区外で、東側も排水用の溝に切られるが、長

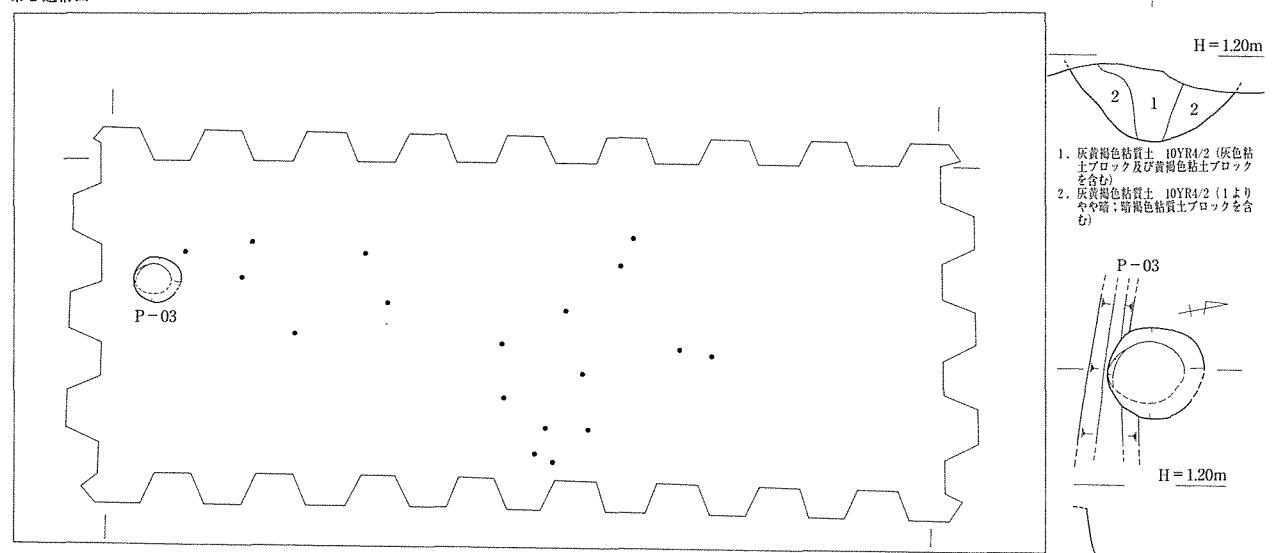


第11図 AW37区出土遺物実測図

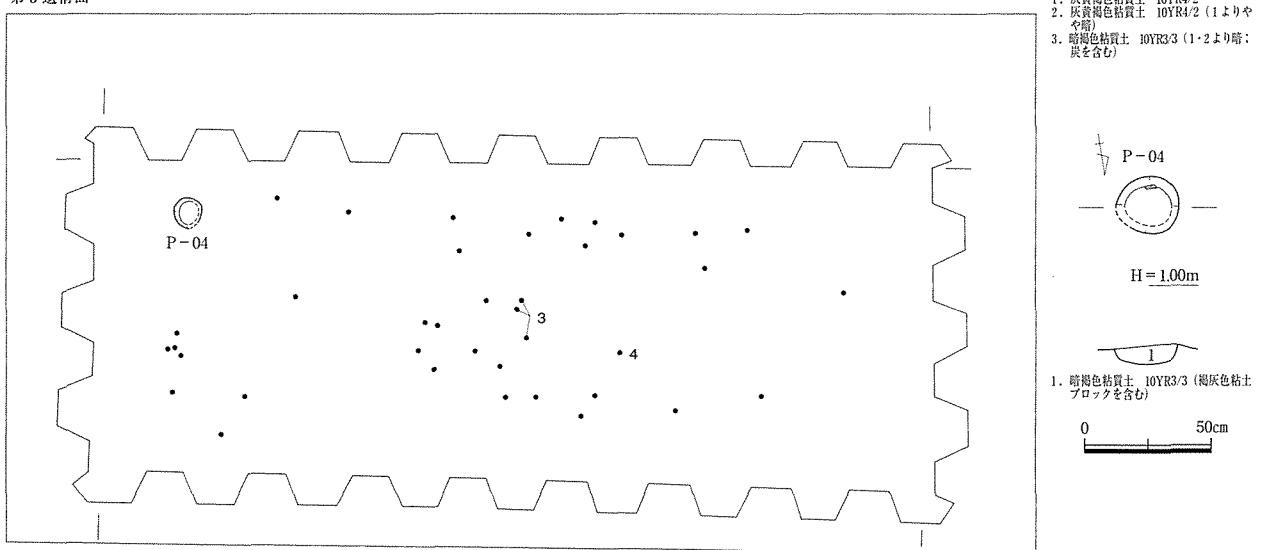
第1 遺構面



第2 遺構面



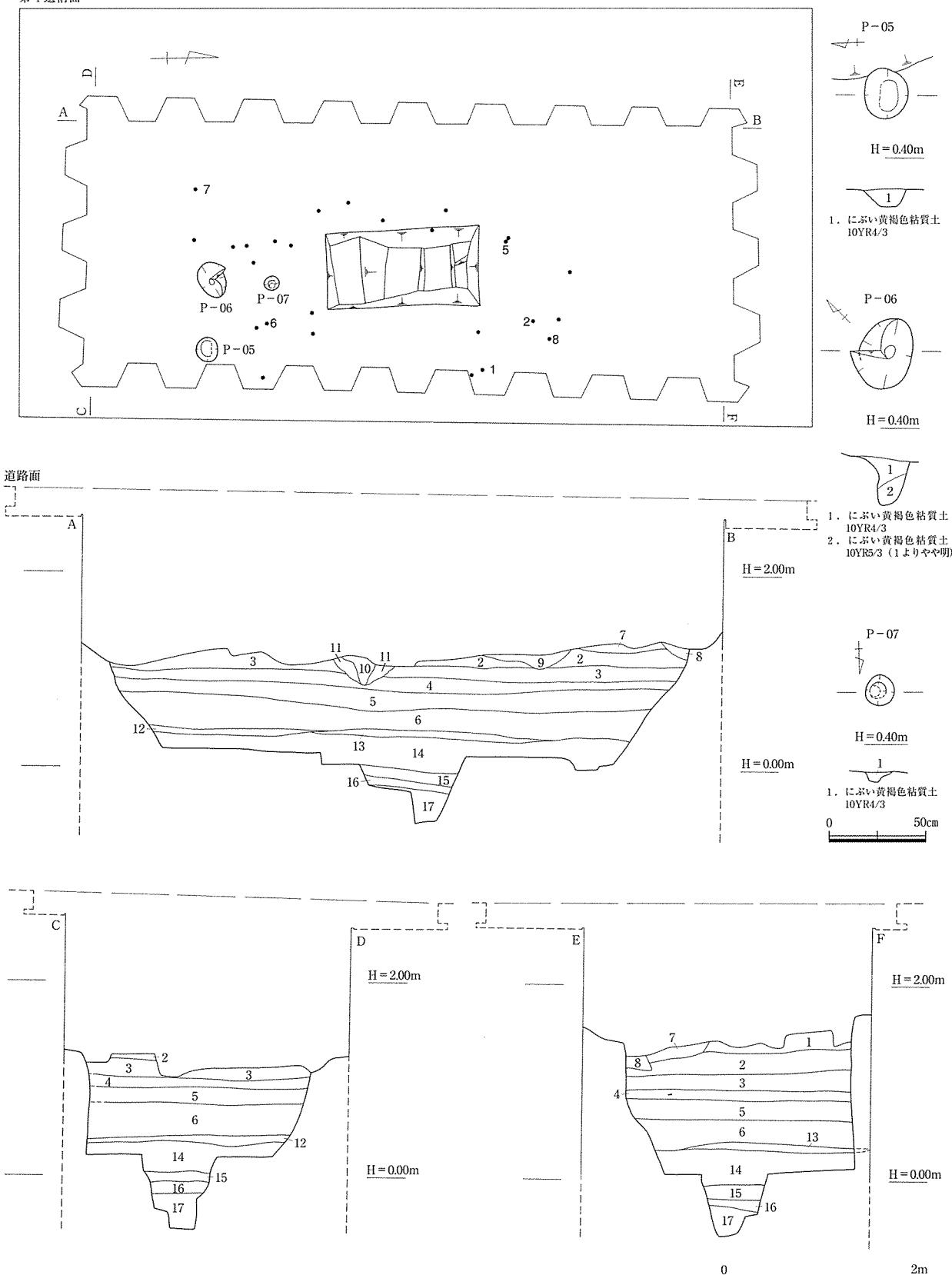
第3 遺構面



0 2m

第12図 AW37区および同区内検出遺構実測図(1)

第4 遺構面



1. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
2. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (1よりやや暗)
3. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (2よりやや暗)
4. 暗褐色粘質土 10YR3/3 (土器片を僅かに含む)
5. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2~にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 (土器片をごく僅かに含む)
6. 暗褐色粘質土 10YR3/3 (4よりやや暗; 土器片を多く含む)
7. オリーブ黒色粘土 7SY3/1
8. オリーブ黒色粘土 7SY3/1と灰黄色砂 25Y7/2の混合 (客土)
9. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (1・2・3よりやや暗; しまってない; 客土)
10. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (2より明; 灰色粘土ブロック及びにぶい黄褐色粘土ブロックを含む)
11. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (2よりやや明るく、10よりやや暗; 暗褐色粘土ブロックを含む)
12. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
13. オリーブ黒色粘土 5Y3/2
14. オリーブ黒色粘土 5Y3/1 (13より暗)
15. オリーブ黒色粘土 5Y3/1 (14よりやや明)
16. 暗オリーブ灰色シルト 25GY3/1
17. 暗青灰砂 10BG4/1

第13図 AW37区および同区内検出遺構実測図(2)

径0.64m、検出面からの深さ0.3mを測る。平面形は円形とみられ、埋土は灰黄褐色粘質土が2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

P-03は調査区南端付近から検出した。平面形は橢円形で、断面は逆台形状を呈する。規模は、長径0.38m、短径0.36m、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の3層に分けられ、土師器口縁部片や底部片が出土したが、図化するには至らなかった。

P-04は調査区南西端付近から検出した。平面形は橢円形で、断面は皿状である。規模は、長径0.25m、短径0.22m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は暗褐色粘質土の1層で、弥生時代とみられる高杯片等が出土したが、図化するには至らなかった。

P-05は調査区南東端付近から検出した。平面形は橢円形で、断面は逆台形状である。規模は、長径0.26m、短径0.22m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層で、遺物は出土しなかった。

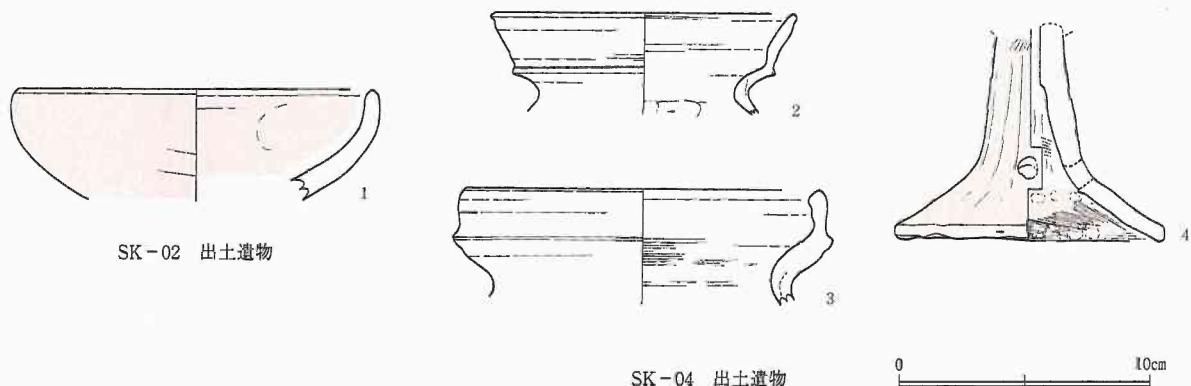
P-06はP-05の西約0.4mから検出した。平面形は橢円形で、断面は不定形である。規模は、長径0.36m、短径0.27m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

P-07はP-06の北約0.4mから検出した。平面形はほぼ円形で、断面は一部二段掘りである。規模は、径0.15m、検出面からの深さ0.05mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層で、遺物は出土しなかった。

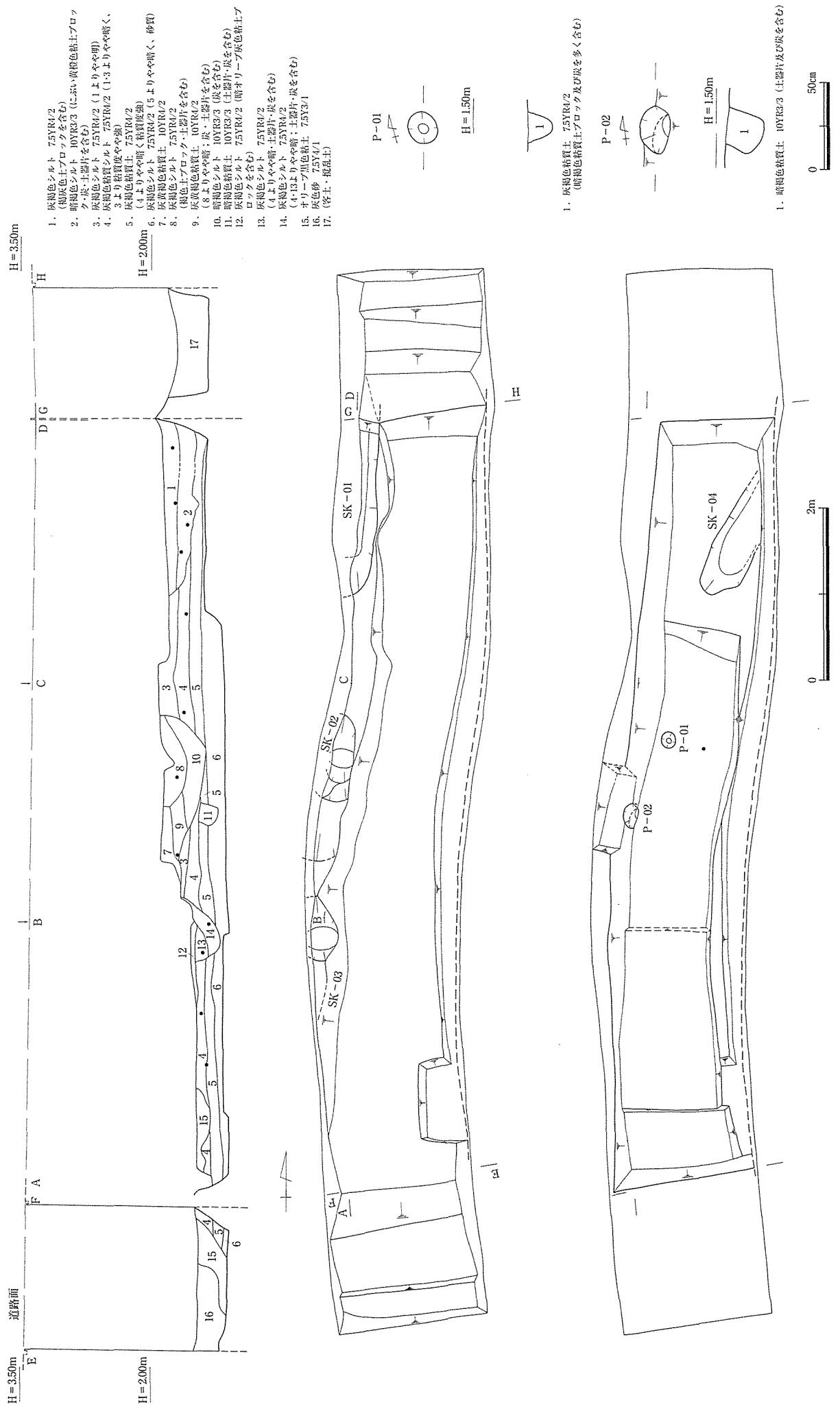
なお本調査区検出のピット状遺構は、明確に柱痕を確認できるものではなく、またそのそれぞれの検出面での位置関係を見ても施設を構成するものではないと考えられる。

遺構外出土遺物（第11図、PL. 13・14）

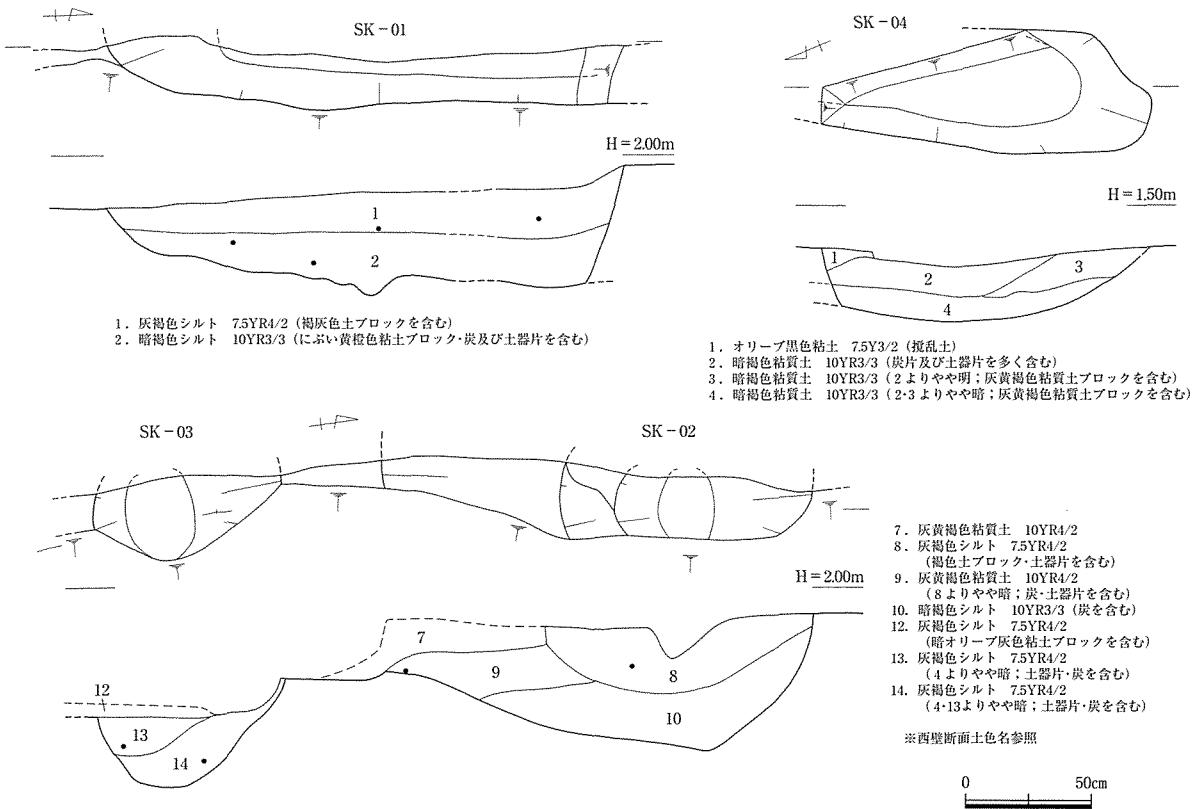
各遺物包含層のうち、第2～4層から古墳時代以降の、第5・6層から弥生時代後期の遺物が出土しており、第5・6層出土の(1)～(8)を図化した。(1)字状口縁の壺(1)(2)のうち(1)には頸肩部外面に連続刺突文がなされ、外面縦ハケ目のちヘラミガキが認められる。(2)の口縁部は外面ハケ目のちヨコナデである。胴部片(3)は2～3条の平行沈線で少なくとも4段に区画した中に連続入り組み渦のスタンプ文を施す。複合口縁の甕(4)(5)は、口縁部外面に平行沈線が施される。(6)は逆ハの字に大きく開く口縁部片で、端面に平行沈線がみられる。底部(7)は外面ナデ成形のちハケ目調整、(8)は外面ナデ調整でハケ目痕が認められる。



第14図 AW28北区出土遺物実測図



第15図 AW28北区および同区内検出遺構実測図(1)



第16図 AW28北区内検出遺構実測図(2)

5) AW28北区の調査(第14~16図、PL. 5・6・14)

調査対象範囲南端付近で、先に調査したAW28区の北に接続して位置する。上位の搅乱が多く、部分的に道路面から2m近く客土が認められるところもあるが、AW28区の調査では遺構の検出がなかったこの客土除去面が第1遺構面(第3層<灰褐色シルト>上面：標高約1.9m)となる。搅乱と調査区外のため部分的な検出であるが、土坑3基(SK-01~03)を検出した。また、AW28区の第10層に対応する第5層(灰褐色粘質土)上面も遺構面である(第2遺構面：標高約1.5m：AW28区の第1遺構面対応)。土坑1基(SK-04)とピット状遺構2基(P-01、02)を検出したが、SK-04とP-01は第2遺構面より下位まで続く搅乱土除去面からの検出のため、あるいは第1遺構面に所属する遺構の可能性もある。なお、調査面積は17.82m²である。

SK-01 (第16図、PL. 5)

調査区北西端部から検出した。西側と北側は調査区外となり、東側は搅乱による削平されているため全体の規模や形状は不明であるが、検出規模は長径2.03m、短径0.30m、検出面からの深さ0.50mである。埋土は灰褐色シルトと暗褐色シルトの2層で、須恵器片や内面に暗文の施された高杯等の土師器片が出土したが、図化には至らなかった。

SK-02 (第16図、PL. 6・14)

SK-01の南約1.4mの調査区中央西側から検出した。西側は調査区外、東側は搅乱による削平のため全体の規模や形状は不明であるが、検出規模は長径1.70m、短径0.32m、検出面からの深さ0.53mである。埋土は灰褐色シルト・灰黄褐色粘質土・暗褐色シルトの3層で、土師器片が出土しており、碗(第14図-1)を図化した。内外面赤彩で体部は内湾して立ち上がり、端部は丸く納められる。

SK-03 (第16図、PL. 6)

SK-02の南約0.8mの調査区中央よりやや南の西側から検出した。西側は調査区外、東側は搅乱によ

る削平のため全体の規模や形状は不明であるが、検出規模は長径0.76m、短径0.32m、検出面からの深さ0.43mである。埋土は灰褐色シルトの2層で、鼓形器台や赤彩の高杯等の土師器片が出土しているが、図化には至らなかった。

SK-04 (第16図、PL. 6・14)

調査区北東端部から検出された。北東側は調査区外であるが、平面形はややいびつな長楕円形の可能性も考えられ、断面は逆台形状とみられる。上位は削平されているものの検出規模は長径1.30m、短径0.49m、検出面からの深さ0.28mである。埋土は暗褐色粘質土の3層で、土師器片が出土しており第14図-(2)～(4)を図化した。複合口縁の甕(2)は口縁部内外面にヨコナデ調整がなされ、同じく甕(3)は口縁部の端部を内側にやや肥厚する。高杯脚部(4)は円孔1を持ち、内外面赤彩が施される。

P-01、02 (第15図、PL. 6)

P-01は調査区中央よりやや西側から検出した。上位が搅乱により削平されているが、平面ほぼ円形・断面逆山形で、規模は径0.18m程度、検出面からの深さ0.14mである。埋土は灰褐色粘質土の1層で、遺物は出土しなかった。

P-02はP-01の0.7m程度南から検出した。東側は削平されているが、南側に向けてやや斜めに掘り込まれる。検出規模は南北で0.27m、東西で0.17m、深さ0.27mである。埋土は暗褐色粘質土の1層で、遺物は赤彩の土師器細片が出土しているが、図化には至らなかった。

なおこれらのピット状遺構には明確な柱痕は認められず、また調査範囲内における位置関係等から施設を構成するものではないものとみられる。

遺構外出土遺物

各遺物包含層のうち、第3・4層から古墳時代以降の、第5・6層から古墳時代前期・中期の遺物が出土しているが図化するには至らなかった。

6) AW29南区の調査(第17・18図、PL. 7・14・15)

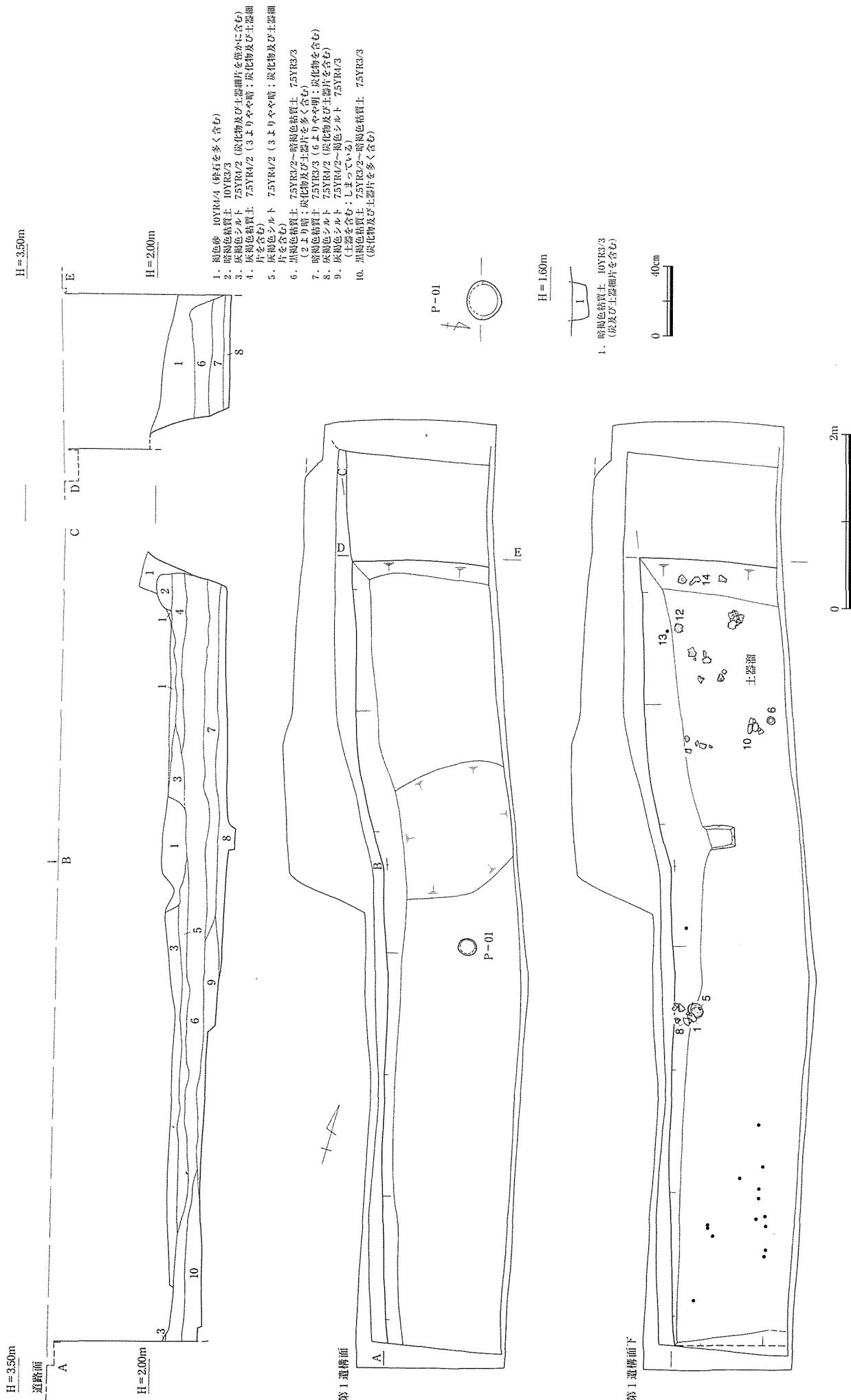
調査対象範囲中央よりやや南で、先に調査したAW29区の南に接続して位置する。第6層(黒褐色粘質土～暗褐色粘質土)上面が遺構面で(標高1.6m前後)、AW29区の第1遺構面に対応するものとみられる。ピット状遺構1基が検出されている。また明瞭な掘り方を伴う遺構ではないものの、調査区の北側の第6層中・中央よりやや南の西壁部の第9層(灰褐色シルト)中・南側の第10層(黒褐色粘質土)中には比較的遺物の集中が認められ(いずれも標高1.5m前後)、特に北側のものは遺物の遺存状況も良いことからここでは土器溜として扱うこととする。なお、調査面積は15.41m²である。

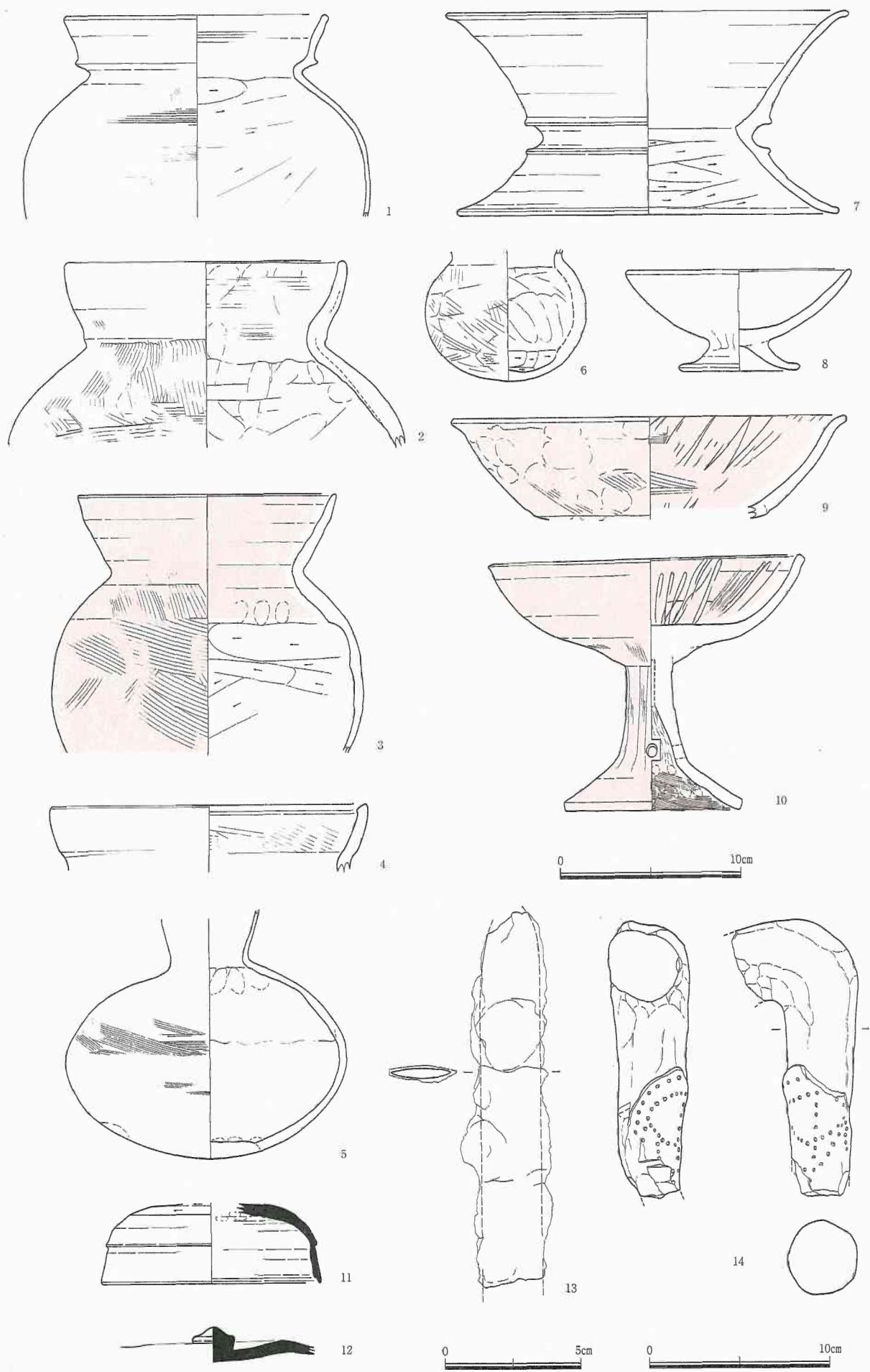
P-01 (第17図、PL. 7)

調査区ほぼ中央から検出した。平面はやや楕円形で、断面は長方形状を呈する。規模は長径0.22m、短径0.20m、深さ0.1mを測るが、遺構面の層位からするともう少し深かった可能性がある。埋土は暗褐色粘質土の1層で、遺物は出土しなかった。なお、柱痕は認められず、調査範囲内ではあるが同一遺構面上からは同様のピット状遺構は検出されておらず、施設を構成するものである可能性は低いと考えられる。

土器溜 (第17・18図、PL. 7・14・15)

調査区北端部付近に位置する。調査範囲内においては上述のとおり遺構の掘り方は検出していないが、調査区の北端から約2mの範囲で古墳時代前期～後期の遺物が集中して検出された。埋土は第6層(黒褐色粘質土～暗褐色粘質土)である。出土遺物のうち第18図の(2)(3)(6)(9)(10)(12)(13)(14)を図化した。壺(2)(3)はくの字状の口縁部で、(2)よりやや小ぶりの(3)は口縁部のヨコナデが丁寧で端部は上外方へつまみ出される。(2)の口縁部内面には横ハケ目が残る。小型の壺(6)は体部完存で、最大胴径8.8cmを測る。外面成形のちハケ目のちナデ、内面底部ヘラ削り、中位は上位へのナデ上げで





第18図 AW29南区出土遺物実測図

上位は一定方向へのナデがなされる。高杯(9)は有段、(10)は無段の杯部で、内面には赤彩後放射状の暗文2段が施される。須恵器蓋(12)は天井頂部に宝珠形のつまみを持つ。(13)は鉄剣で、遺存長13.68cm、身幅2.2cm、厚さ0.38cmを測る。(14)は人物(武人)の埴輪片と考えられ、ナデ成形される。部位は肩から手首付近で、籠手表現とみられる粘土貼付部には刺突による模様が施される。遺存長15.2cm、断面径4cm程度である。

遺構外出土遺物 (第18図、PL. 14・15)

各遺物包含層から古墳時代の遺物が出土しているが、第6～10層から、前期後半から後期前半の土器が比較的多く検出され、特に第6層からは中期の高杯片が多く出土している。このうち、上述の調査区中央よりやや南の西壁部付近第9層出土の(1)(5)(7)(8)と南側第10層出土の(11)、調査区中央よりやや南の7～9層出土の(4)を図化した。外傾する複合口縁の甕(1)は、口縁部内外面ヨコナデ、肩部に平行沈線が残るもの、胴部は横ハケ目調整である。壺(5)は胴部に最大径を持つ。鼓形器台(7)は稜線にやや鋭さを欠くが、外面および受部内面横ナデ、台部内面ヘラ削りである。(8)はやや小ぶりの低脚杯で、脚部は外反して開く。天井部と口縁部を分ける稜が鈍い須恵器蓋(11)は天井部外面2/3以上のヘラケズリが施される。口縁部(4)はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部を僅かに内側に肥厚する。内外面横ナデで、内面にハケ目が残る。

7) AW37南区の調査(第19図、PL. 8)

調査対象範囲北部で、先に調査したAW37区の南に接続して位置する。客土除去面(第2層<灰オーリーブ色粘質土>・第3層<灰黄褐色粘質土>上面)と第5層(灰黄褐色粘質土)上面が遺構検出面で、前者(第1遺構面:標高約1.55m)から噴砂跡3ヶ所を、後者(第2遺構面:標高約1.2m:AW37区の第2遺構面対応)から土坑1基(SK-01)を検出した。なお、調査面積は21.49m²である。

噴砂跡 (第19図、PL. 8)

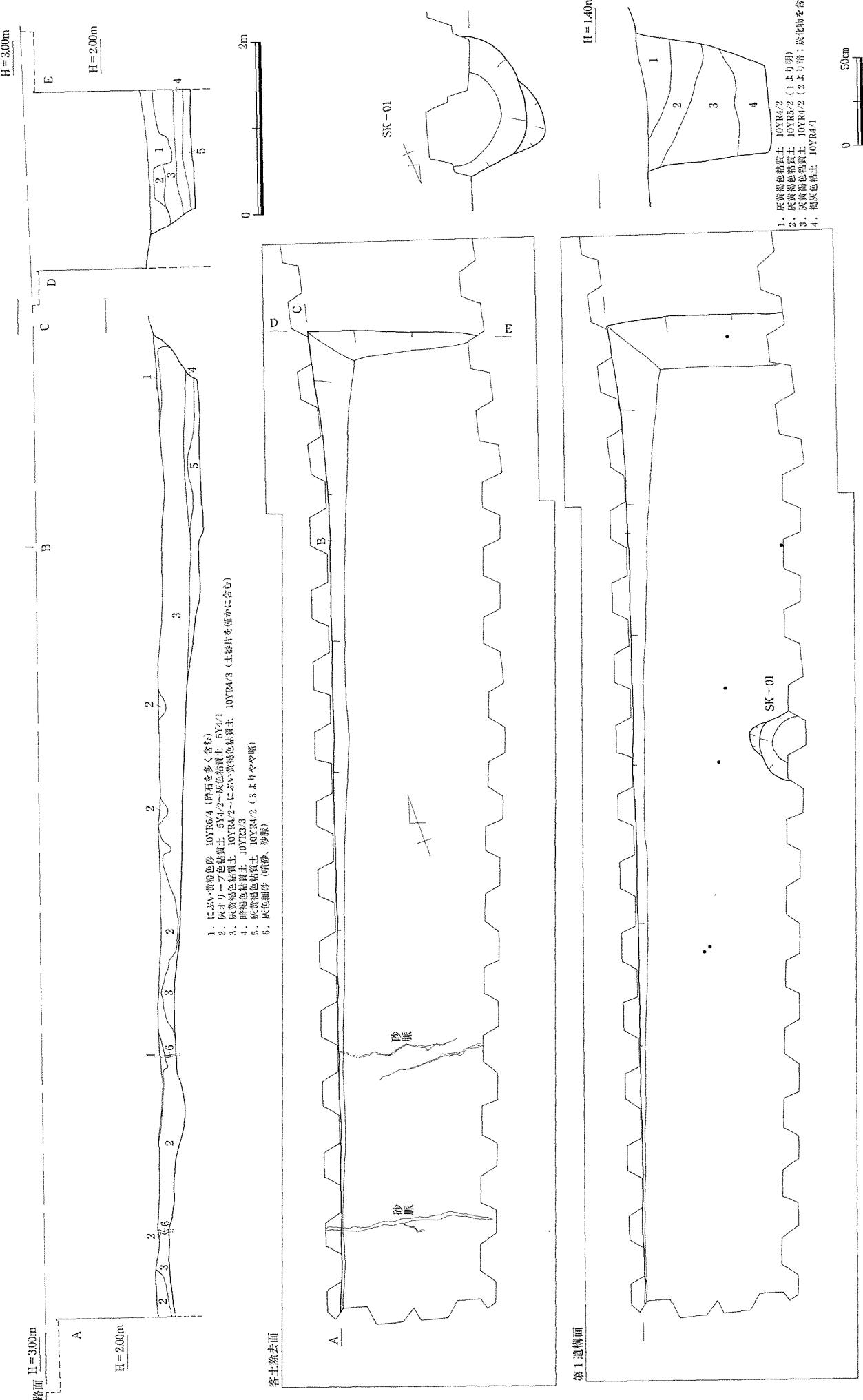
調査区南側から最大幅5cmの砂脈3条を検出した。走向は東一西と、西北西一東南東で、上位が削平されているためいずれの時代の面まで達したかは不明であるが、この砂脈の中を少なくとも標高1.6m付近までは噴砂が上昇している。

SK-01 (第19図、PL. 8)

調査区ほぼ中央東端から検出した。東側は調査区外となるが、平面形は橢円形と考えられ、主軸はN-40°-E程度をとるものとみられる。断面は逆台形状で、規模は長径0.8m以上、短径0.55m以上で、深さは0.76mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土と褐灰色粘土の4層に分かれる。中から須恵器および土師器の細片が僅かに検出されたが図化するには至らなかった。

遺構外出土遺物

この調査区では遺物の出土はごく僅かで、第3層から古墳時代以降の須恵器片と土師器片が検出されたが、いずれも図化するには至らなかった。



第19図 AW37南区および同区内検出遺構実測図

8) AW29北区の調査(第20・21図、PL. 8・9・15)

調査対象範囲中央よりやや南で、先に調査したAW29南区、AW29区の北に接続して位置する。調査地中央よりやや北に廃棄マンホールによる搅乱が深くまで現存するが、客土除去面(第3層<灰黄褐色粘質土>上面：標高1.55m前後)が遺構面(AW29の第1遺構面対応)で、ピット状遺構6基(P-01～06)を検出した。なお、調査面積は14.12m²である。

P-01～06 (第20図、PL. 8・9)

P-01は調査区南西端部付近から検出した。平面円形、断面長方形形状で規模は、径0.21m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土の2層で、有赤彩を含む土師器細片が出土したが、図化には至らなかった。

P-02はP-01の北西0.2m弱に位置する。平面円形、断面いびつな逆台形状で規模は、径0.24m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土の1層で、有赤彩を含む土師器細片と須恵器細片が出土したが、図化には至らなかった。

P-03はP-02の東0.4mに位置する。平面橢円形、断面皿状で規模は、長径0.16m、短径0.12m、検出面からの深さ0.04mを測る。埋土は炭化物を含む褐灰色粘土の1層で、有赤彩高杯片を含む土師器細片と須恵器片が出土したが、図化には至らなかった。

P-04はP-03の北約0.4m強に位置する。平面いびつな円形、断面逆台形状で規模は、径0.33m、検出面からの深さ0.21mを測る。埋土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土の2層で、土師器細片が出土したが、図化には至らなかった。

P-05、06はP-01の南1mの調査区南壁断面からの検出である。東側のP-05は断面椀形で、径0.18m、検出面からの深さ0.17mを測り、埋土は炭化物を多く含む褐灰色粘質土の1層である。西側のP-06は断面不定形で、径0.18m、深さ0.43mを測り、埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の3層である。

なお本調査区検出のピット状遺構は、明確に柱痕を確認できるものはないが、調査地狭小のため施設を構成するものかどうかは不明である。

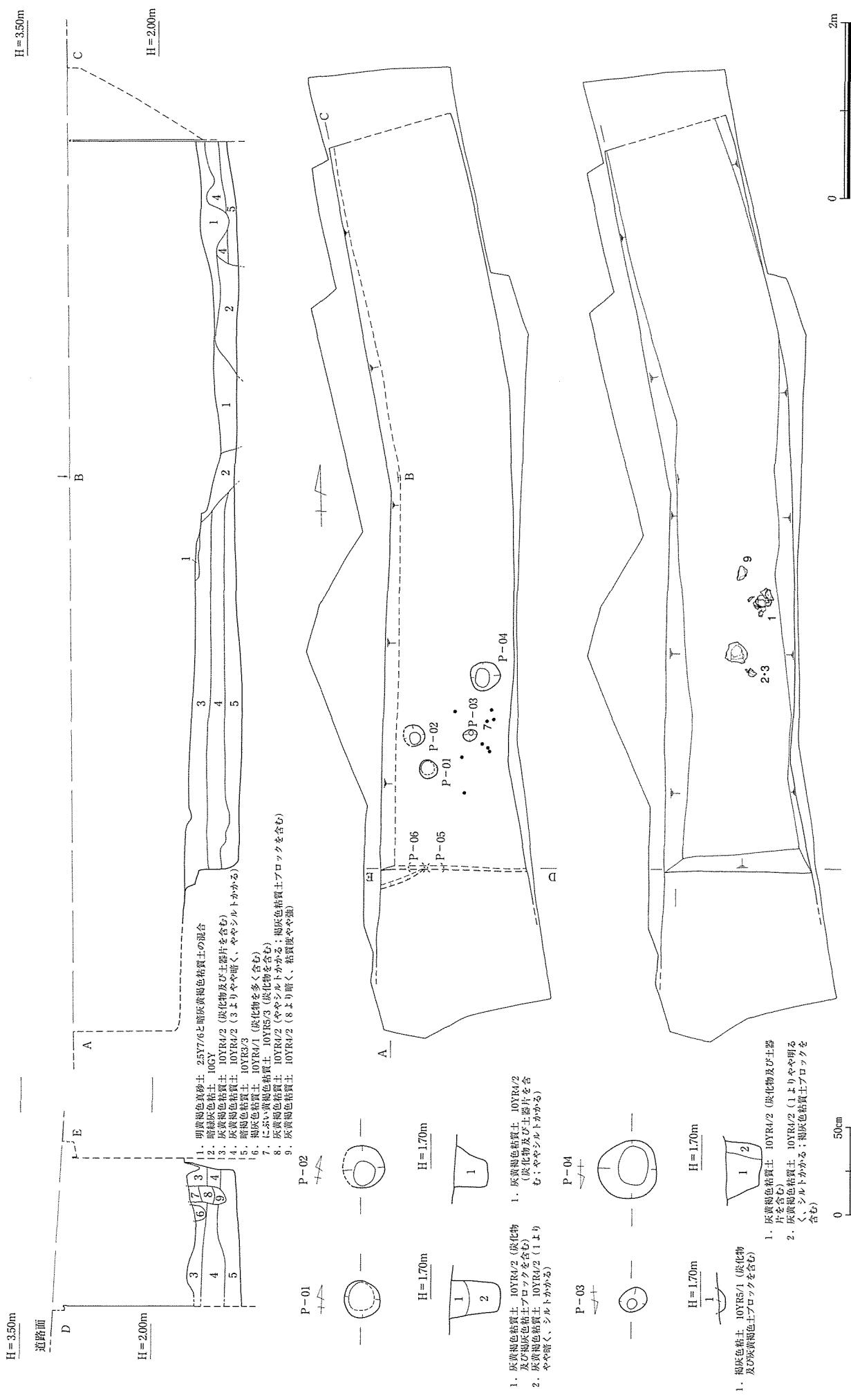
遺構外出土遺物 (第21図、PL. 15)

各遺物包含層のうち、第3層から古墳時代および奈良・平安時代の、第4層・5層の境界付近および第5層から古墳時代前期の遺物が出土しており、(1)～(9)を図化した。複合口縁の壺(1)(3)は、いずれも口縁部ヨコナデで、(1)は頸部縦ハケ目のち体部ハケ目調整される。壺(2)はいわゆる長頸壺で、復元口径10.4cm、最大胴径16.3cmで、口縁部ヨコナデ、外面肩部平行沈線、体部内面丁寧なヘラケズリのちナデ。外面にしっかりと圧痕の残る脚部(4)は、内面上位に横位のナデがなされたのち赤彩が施される。製塩土器(5)は浅い椀形を呈するものとみられ、手捏ね成形で粘土を補充して肥厚させ端面を作り出している。杯(6)(7)のうち、(6)は底部ヘラ切りのちナデ、(7)は糸切りである。砥石(8)は長軸方向の4面に使用痕が認められる。(9)は鉄塊とみられ、長さ16.1cm、幅9.9cm、厚さ4.95cmを測る。

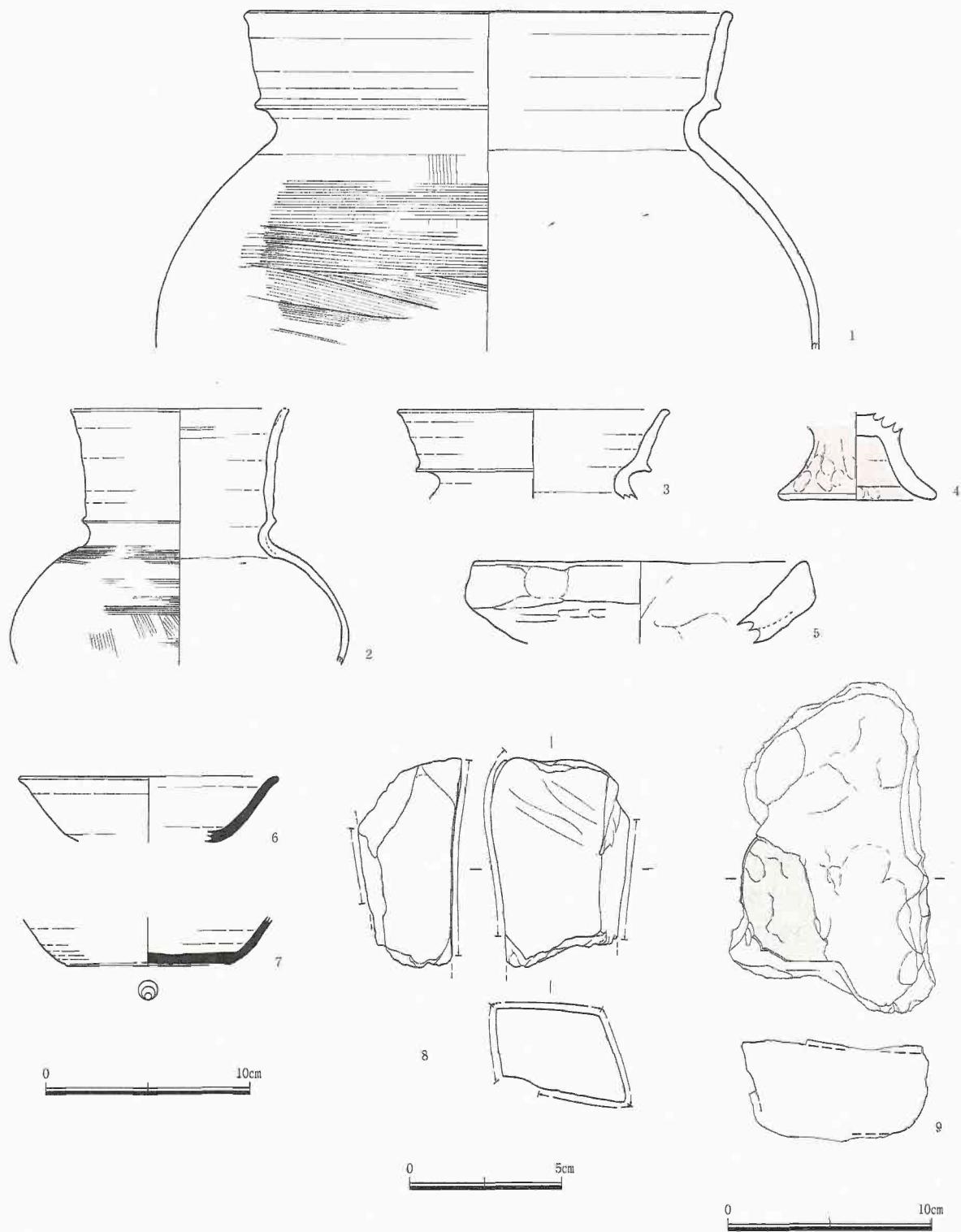
〈平成19年度の調査〉

9) AE22南区の調査(第22・23図、PL. 10～12・16)

調査対象範囲南端近くで、狐川から15m程度北西の東側車道・歩道部分、先に調査したAW28北区と約16m幅の道路を挟んだ反対付近に位置する。また調査区南側の一部分は平成9年度下水道新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査地と重なる。客土除去面(第8層<灰黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土>上面)と第3層(灰黄褐色粘質土)上面が遺構面で、前者(第1遺構面：標高約1.7m)から土坑1基(SK-01)とピット状遺構1基(P-01)を、後者(第2遺構面：標高1.45m：1977年調査の第3層上面对応)から土坑1



第20図 AW29北区および同区内検出遺構実測図



第21図 AW29北区出土遺物実測図

基(SK-02)とピット状遺構4基(P-02~05)を検出した。また明瞭な掘り方を伴う遺構ではないものの、調査区の北側の第9層(灰黄褐色粘質土～暗褐色粘質土)中には遺物の集中が認められ(標高1.3~1.45m)遺物の遺存状況も良いことからここでは土器溜として扱うこととする。さらに今回の調査では遺構の検出がなく図化はしなかったが、1977年調査時には第4層対応層中および第6層対応層上面から土坑、ピット状遺構、溝状遺構が検出されている。なお、調査面積は31.87m²である。

SK-01 (第22図、PL. 10)

第1遺構面の調査区中央より北側の東壁部分から検出した。上位および西側は搅乱によって削平されており、東側は調査区外となる。このため平面形は不明瞭ながら長楕円形を想定すると、主軸はN=38°-E程度にとるものと思われる。断面は一部二段掘りで、規模は検出長で、長軸1.52m、短軸0.32m、深さ0.22mを測る。埋土は炭化物を含む灰褐色粘土と灰黄褐色粘土の3層で、須恵器口縁部片1点と土師器の複合口縁部片、有段・無段の赤彩高杯等が出土したが、図化するには至らなかった。

SK-02 (第22図、PL. 10)

第2遺構面の調査区北側の東壁部分から検出した。遺構の東側は調査区外となるため平面形は不明瞭ながら、隅丸長方形を想定すると、主軸はN=7°-E程度にとるものと思われる。断面は一部二段掘りで、規模は検出長で、長軸0.61m、短軸0.20m、深さ0.11mを測る。埋土は炭化物を含む暗褐色粘質土の1層で、土師器細片が出土したが、図化するには至らなかった。

P-01~05 (第22図、PL. 10・11)

P-01は第1遺構面の調査区北端付近から検出した。規模は検出長で、長径0.22m、短径0.20m、深さ0.06mを測る。埋土は炭化物を含む褐灰色粘土の1層で、土師器細片が出土したが、図化するには至らなかった。第2遺構面から検出したP-02~05のうち、P-02はSK-02の北西約0.7mに位置し、規模は長径0.43m、短径0.30m、深さ0.21mを測る。埋土は暗褐色粘質土の3層で、土師器甕口縁部片(第23図-6)や高杯片等が出土した。このうち小型の甕(6)は短い口縁部で、口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ目調整である。P-03はP-02の南約1.2mに位置する。規模は長径0.20m、短径0.16m、深さ0.06mで、埋土は暗褐色粘質土と灰褐色粘質土の2層である。遺物は検出されなかった。P-04はP-03の南西約3.6mに位置し、規模は長径0.36m、短径0.33m、深さ0.21mである。埋土は暗褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、暗灰黄色粘質土の3層で、中から有赤彩を含む土師器細片が検出されたが、図化には至らなかった。P-05はP-04の北約0.4mに位置し、規模は径0.13m、深さ0.08mである。埋土は灰黄褐色粘質土とオリーブ灰色シルトの2層である。遺物は検出されなかった。

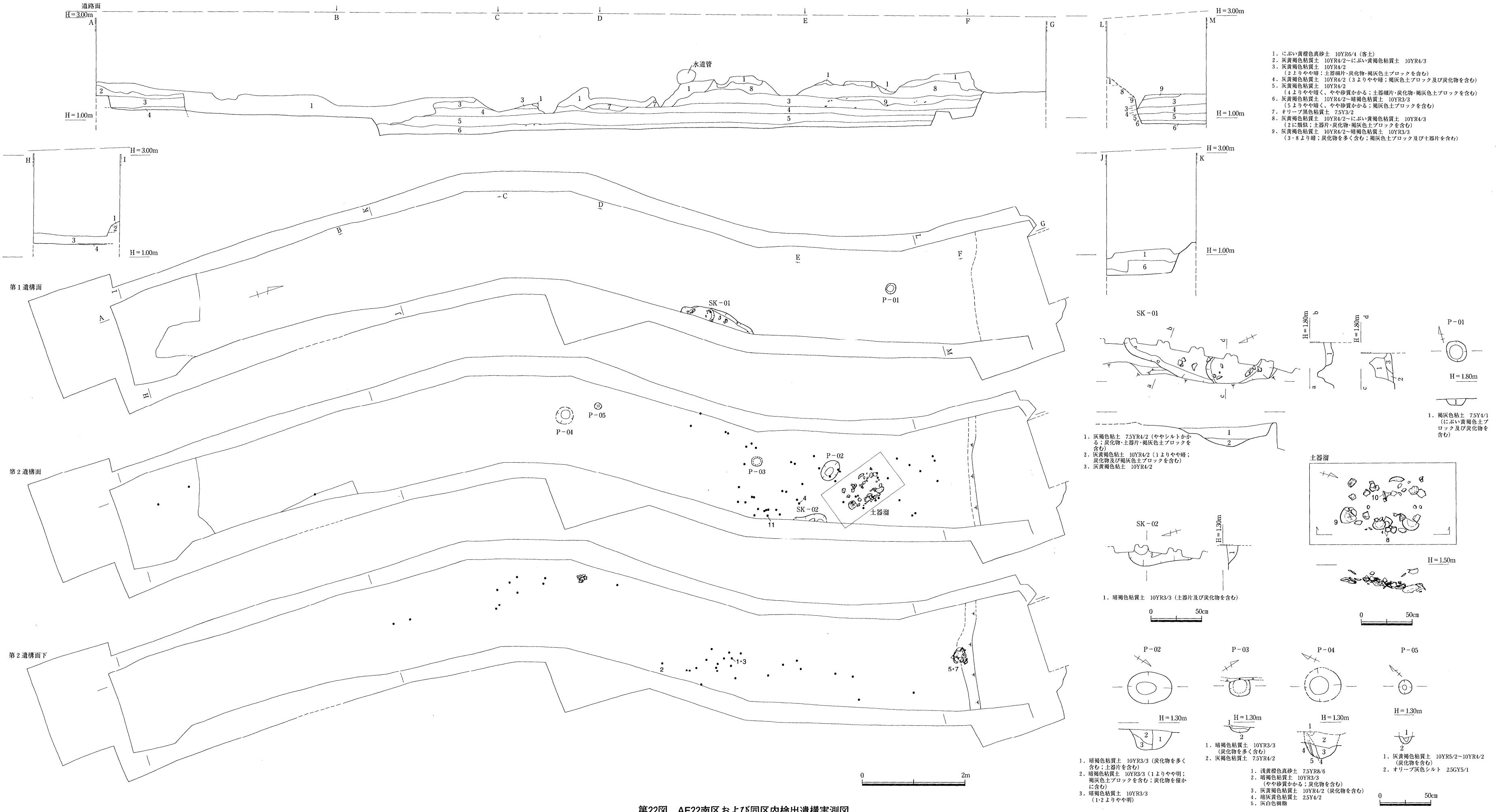
なお本調査区検出のピット状遺構は、明確に柱痕を確認できるものはないが、調査地狭小のため施設を構成するものかどうかは不明である。

土器溜 (第22図、PL. 11・16)

調査区北端部付近に位置する。調査範囲内においては上述のとおり遺構の掘り方は検出していないが、長さ1m、幅0.6m程度の範囲に古墳時代中期の遺物が集中して検出された。出土遺物のうち第23図の(8)(9)(10)(12)を図化した。小壺(8)の体部はややつぶれた球形で、外傾する口縁部は端部をつまんでやや細る。無段の赤彩高杯杯部(9)は内面に放射状の暗文を二段に施す。同脚部(10)は底径9.4cmを測り、内面中位に工具痕が周回する。(12)は土師質手捏ねの土製品で、色調は淡黄褐色で黒班があり、外面に縦・斜位の線刻が認められる。

遺構外出土遺物 (第23図、PL. 11・16)

各遺物包含層のうち、第8、3~5層から古墳時代前期・中期の、第6層から弥生時代後期の遺物が出土している。このうち甕(1)~(5)、(7)と椀(11)を図化した。第6層出土の甕(1)~(3)のうち(1)は口縁端部を上下に肥厚し、端面には4条の沈線がなされる。肩部に上向きの把手が付く。(2)は口縁端面に3条の沈線が施され、体部外面縦ハケ目、内面ヘラ削りである。底部(3)は外面ハケ目、内面上位へのヘラ削りである。複合口縁の甕(4)は第8層出土、(5)(7)は第4または5層の出土で、いずれも口縁部ヨコナデ、肩部外面横ハケ目、内面ヘラ削りのちナデである。赤彩の椀(11)は第8層出土で、内湾する体部から口縁部で上位へ立ち上がり丸くおさめる。口縁部横位のナデ、体部外面ヘラ削りのちナデ、内面ナデ調整される。



第22図 AE22南区および同区内検出遺構実測図



第23図 AE22南区出土遺物実測図

10) AW28南区の調査(第24図、PL. 12)

調査対象範囲南端付近で、先に調査したAW28区の南に接続して位置する。上位の搅乱が著しく、部分的に道路面から2m以上客土が認められるところもある。調査区の北側2/3近くの中央を南北に廃棄の下水管が遺存するとともに、南東端部にはNTT管が南北方向に占用する。しかしながら道路面から約1.5m以下には他の調査区同様に部分的ながら純粋層が遺存しており、この客土除去面(第5層<灰褐色粘質土>上面)が、AW28北区で検出された第1遺構面に対応するものとみられるが、遺構は検出されなかった。また最終掘下げの最下層に部分的に検出された第6層(灰褐色粘質土)の下面が隣接AW28区の第1遺構面(AW28北区の第2遺構面)に対応するものと考えられるが調査範囲外である。なお、調査面積は19.14m²である。

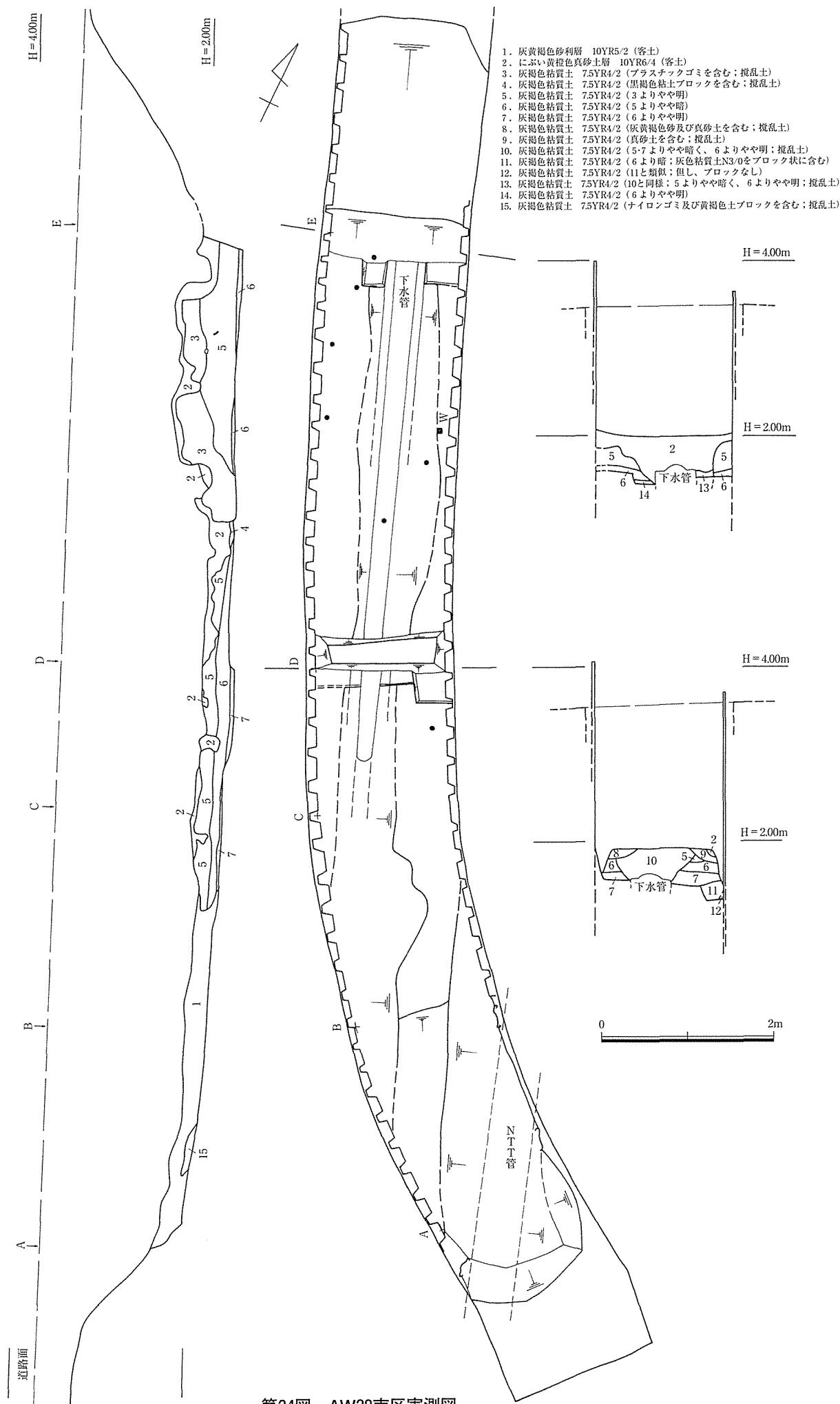
遺構外出土遺物

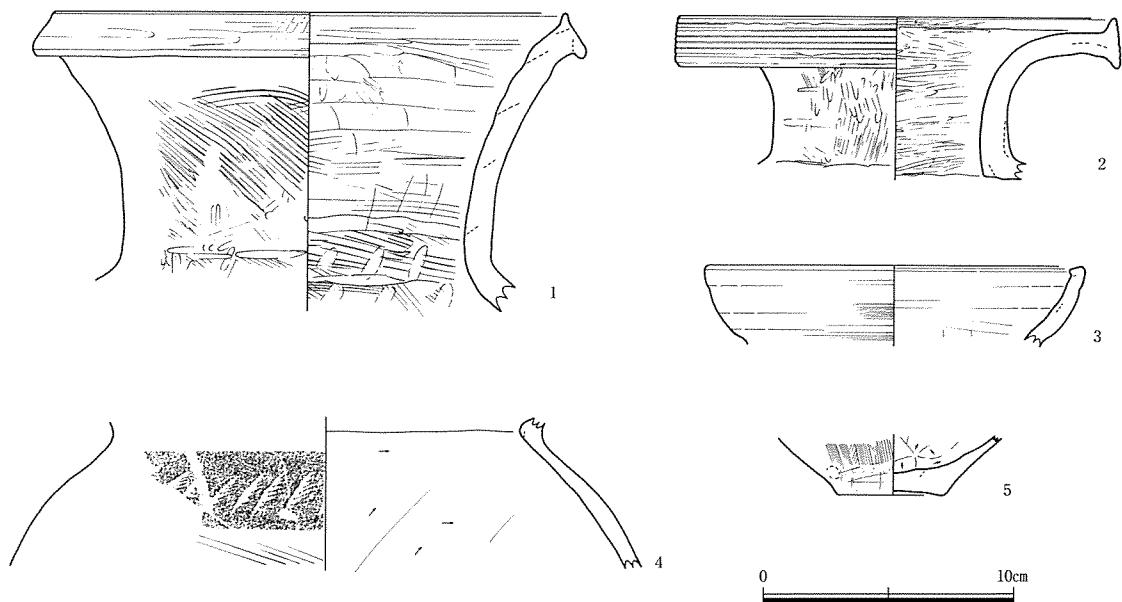
この調査区からの出土遺物は少ないが、第5・6層から須恵器の体部片や土師皿とみられる糸切り底部片・端部内面に煤の付着した口縁部細片、内面に暗文のなされた赤彩の口縁部片といった土師器片が検出されている。また、一度掘りあげた土をまた埋め戻したとみられる搅乱土中から複合口縁の土師器片が出土している。時期は第5・6層が奈良・平安時代頃、搅乱土中のものは古墳時代のものと考えられるが、いずれも図化するには至らなかった。

〈平成17年度の立会調査〉(第25図、PL. 16)

平成17(2005)年度は、前述のとおり工事中に遺物が出土したため関係者で協議がなされ、鳥取市教育委員会が工事立会を実施することになったものである。

調査の結果、2ヶ所の地点、AE24地点(AW29区と約17m幅の道路を挟んだ反対の車道・歩道部分)とAE29地点(AW37区の南東約45m、国道東側歩道部分)から遺物が採取されている。このうち、(1)(5)はAE29地点出土で、壺口縁部(1)は標高0m付近、底部片(5)は同0.5m付近から検出された。AW37区の第5層(灰黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土)・第6層(暗褐色粘質土)対応層からの出土とみられる。このうち(1)の外反する頸部は、口縁端部で肥厚して面をなす。内外面ハケ目のちヘラミガキで、口縁部端面はヨコナデ、一部にヘラミガキ調整される。底部(5)は底外面ナデ、外面ハケ目で下位ナデ、内面ヘラケズリである。またAE24地点出土の(2)(3)(4)のうち、壺口縁部(2)は標高0.3m付近、(3)(4)はそれより上位の検出である。レベルは異なるものの遺物から、(2)はAW29区の第4層(灰黄褐色粘質土)・第5層(オリーブ黒色粘土)対応層、(3)(4)は同調査区の第2・3層(灰褐色粘質土)対応層からの出土とみられる。このうち壺(2)は、口縁部を端部で水平とし、上下に肥厚して外方に面を持つ。この端面には平行沈線のち軽いナデがなされ、外面上位ヨコナデ、下位ハケ目のちヘラミガキ、内面ヘラミガキされる。壺口縁部(3)は内湾ぎみに立ち上がり、端部は内側に肥厚して内傾する面を持つ。頸～肩部片(4)は、肩部に連続刺突文がめぐる。なお、これらの遺物はいずれも上述のとおりの包含層からの出土とみられるが、周辺に遺構が存在する可能性は極めて高く今後も注意をしていく必要がある。





第25図 平成17(2005)年度採取遺物実測図

III. まとめにかえて

今回の調査地は広範な遺跡地の南東端から中央部にかけての国道53号直下に点在する。既存国道直下のため遺跡の上層は削平され、また共同電線溝工事に伴う調査のため狭小ではあったが、層位的に古墳時代～奈良・平安時代、弥生時代後期～古墳時代、弥生時代後期にそれぞれ大別される土坑10基、溝状遺構1条、ピット状遺構23基、土器溜状遺構2ヶ所および遺物包含層を検出したほか、噴砂跡3ヶ所も検出した。遺物は、須恵器、土師器、弥生土器、僅かな鉄器、石器、埴輪片等が出土しており、弥生時代後期と古墳時代前期・中期が主となる。

今回の調査では調査原因の工事内容によって基盤層までの調査区と道路面から2m弱までの調査区があり、かつ調査区によって堆積土のレベルに多少の差はあるが、大きくは、標高0.3～0.9mの粘質土層とオリーブ系の粘土層の境界付近に弥生時代の遺構面が、また標高0.6～1.7mの暗褐色系の粘質土層付近に古墳時代前期・中期頃の遺構面が、それ以上に奈良・平安時代以降の遺構面が存在することが確認された。これらは既往の調査と大きく異なるものではないと考えられる。

なお近年は広範囲にわたる遺跡の発掘調査は減少し、今後は今回のような小規模調査が多くなるだろう。しかしながらこれらの積み重ねによって遺跡地内における各時代面の分布状況その他の情報が蓄積され、遺跡の全体像も今以上に判明するはずである。このことを肝に銘じて今後も調査に当っていかなければならない。

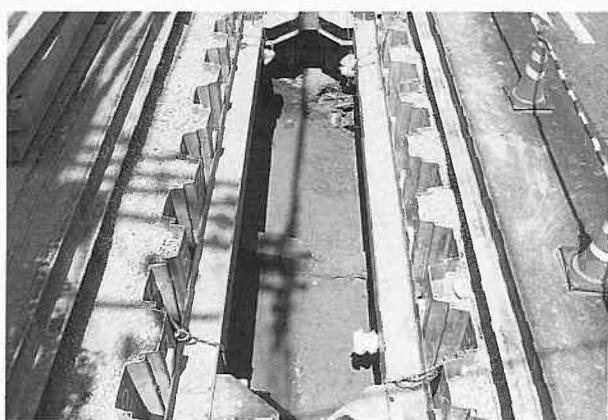
写 真 図 版



1. 調査地周辺航空写真
(平成 5 年撮影)



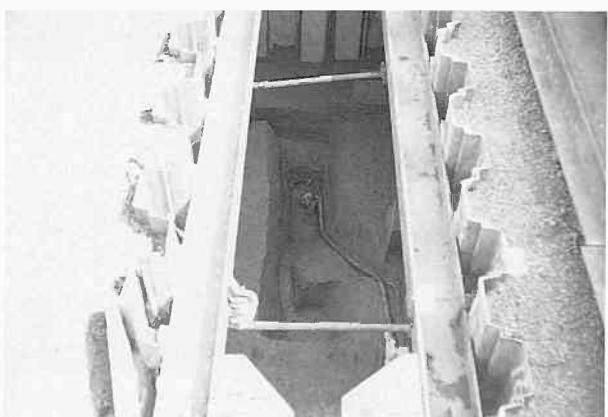
2. 調査地近景(北北東から)



3. AW28区 第1構造面検出状況(南から)



4. AW28区 SK-01(東から)



5. AW28区 SD-01(北から)

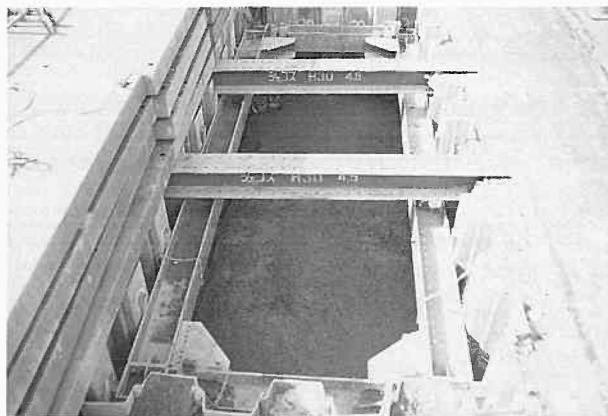


6. AW28区 西壁断面(北東から)



7. AW28区 中央横断ベルト下位断面(北から)

PL. 2



1. AW29区 第1遺構面検出状況(南から)



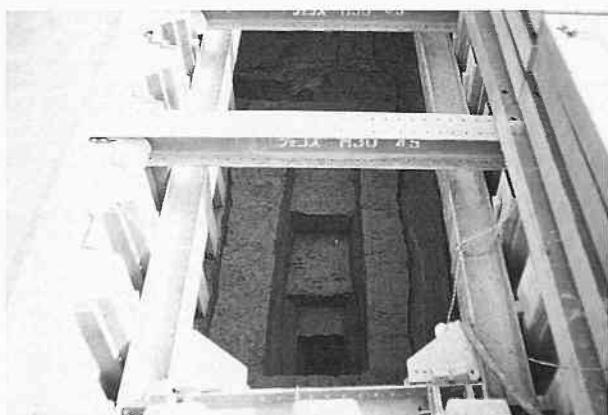
2. AW29区 SK-01(北東から)



3. AW29区 P-01(東から)



4. AW29区 第1遺構面遺物検出状況(北から)



5. AW29区 掘下後(北から)



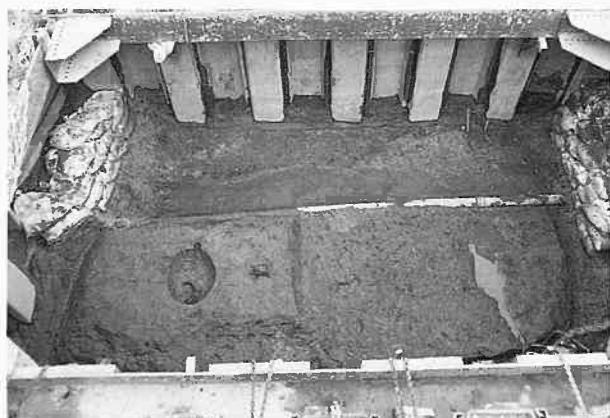
6. AW29区 西壁上位断面(北東から)



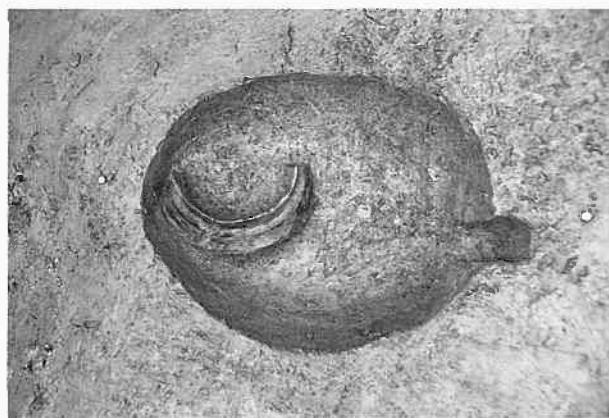
7. AW29区 西壁下位断面(北東から)



8. AW29区 北壁断面(南から)



1. AW33区 第1遭構面検出状況(西から)



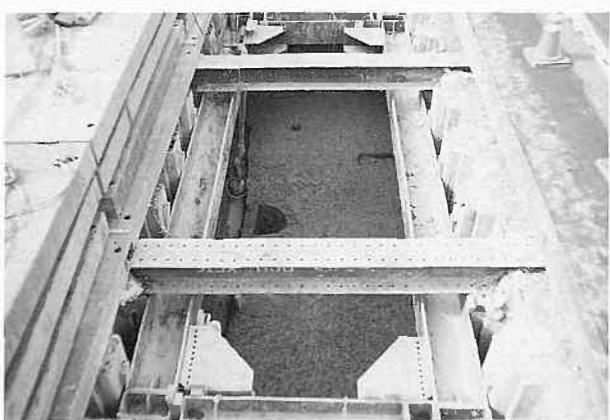
2. AW33区 SK-01(南から)



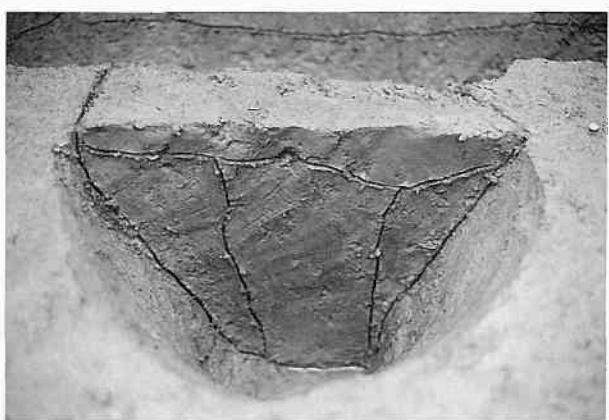
3. AW33区 掘下後(北から)



4. AW33区 中央南北断面(南西から)



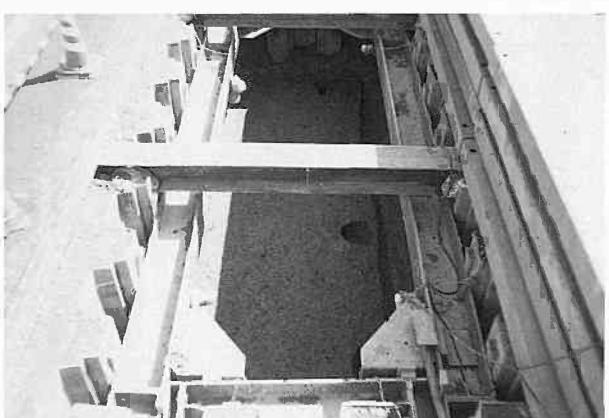
5. AW37区 第1遭構面検出状況(南から)



6. AW37区 P-01断面(東から)

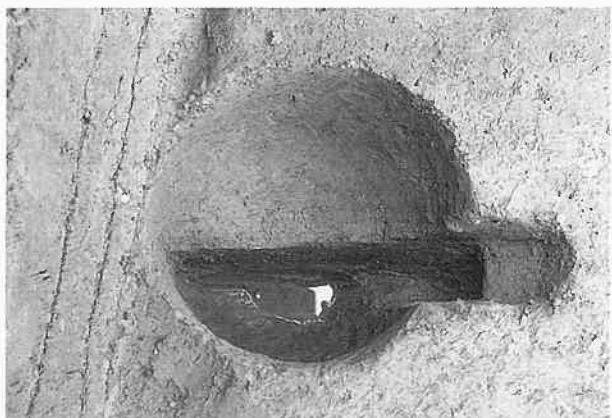


7. AW37区 P-02断面(東から)

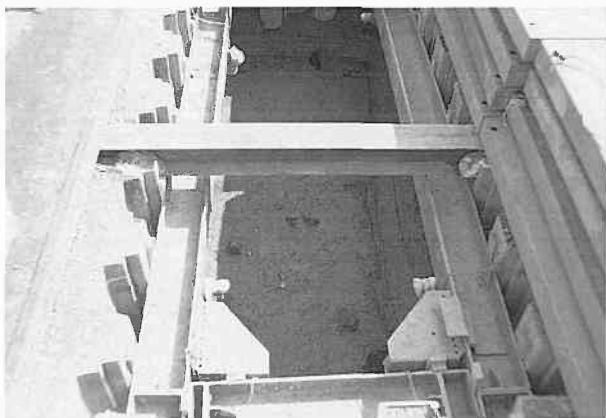


8. AW37区 第2遭構面検出状況(北から)

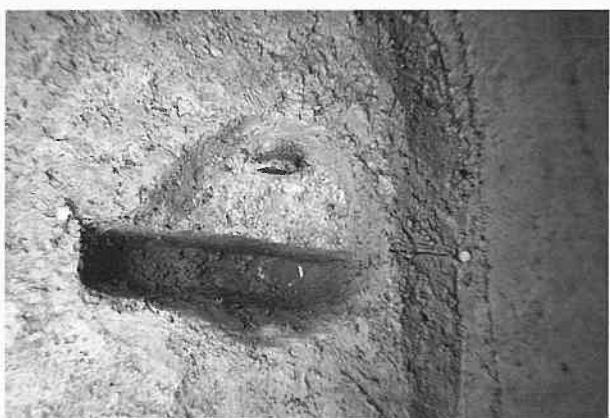
PL. 4



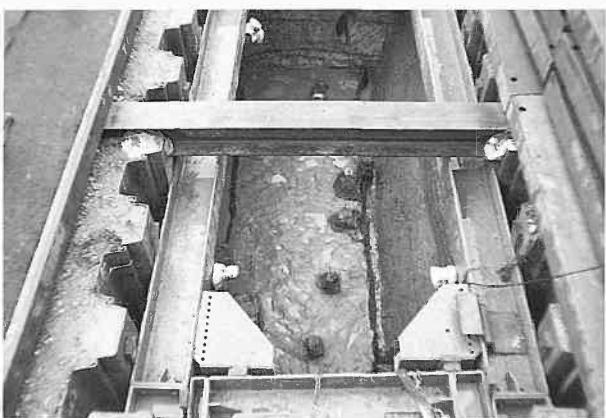
1. AW37区 P-03(東から)



2. AW37区 第3遺構面検出状況(北から)



3. AW37区 P-04(北から)



4. AW37区 第3遺構面下遺物出土状況(1)(北から)



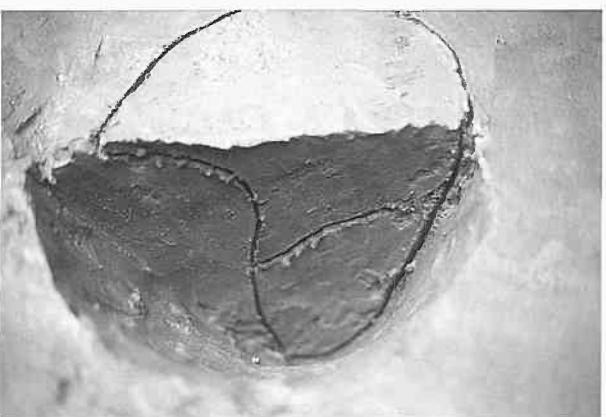
5. AW37区 第3遺構面下遺物出土状況(2)(東から)



6. AW37区 第4遺構面検出状況(西から)



7. AW37区 P-05断面(西から)



8. AW37区 P-06断面(南西から)



1. AW37区 P-07断面(北から)



2. AW37区 西壁断面(南東から)



3. AW37区 北壁断面(南から)



4. AW37区 南壁断面(北から)



5. AW28北区 掘下状況(南から)



6. AW28北区 掘下状況(北から)

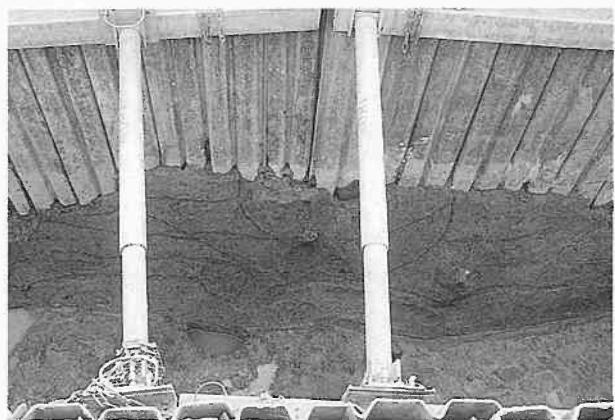


7. AW28北区 SK-01断面(東から)



8. AW28北区 SK-01(東から)

PL. 6



1. AW28北区 SK-02、P-02断面(東から)



2. AW28北区 SK-02(東から)



3. AW28北区 SK-03断面(東から)



4. AW28北区 SK-03(東から)



5. AW28北区 SK-04断面(西北西から)



6. AW28北区 SK-04(南東から)



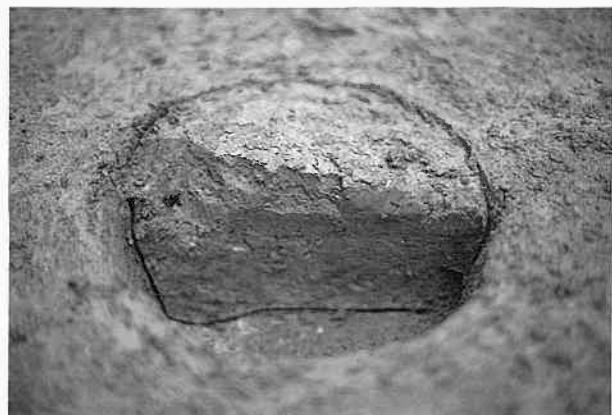
7. AW28北区 P-01断面(東から)



8. AW28北区 P-02(東から)



1. AW29南区 掘下状況(北から)



2. AW29南区 P-01断面(北から)



3. AW29南区 南側遺物出土状況(東から)



4. AW29南区 北側遺物出土状況(1)(西から)



5. AW29南区 北側遺物出土状況(2)(西から)



6. AW29南区 北側遺物出土状況(3)(西から)

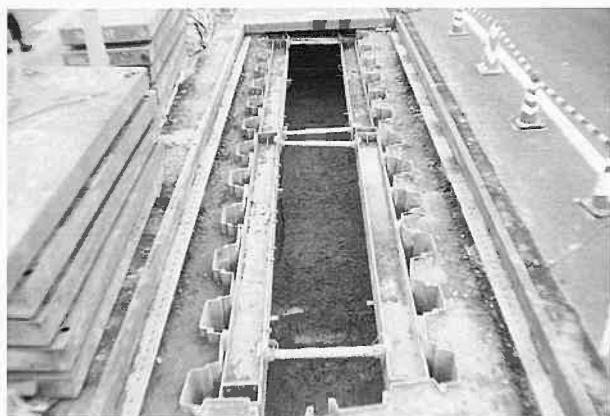


7. AW29南区 西壁断面(南東から)



8. AW29南区 北壁断面(南から)

PL. 8



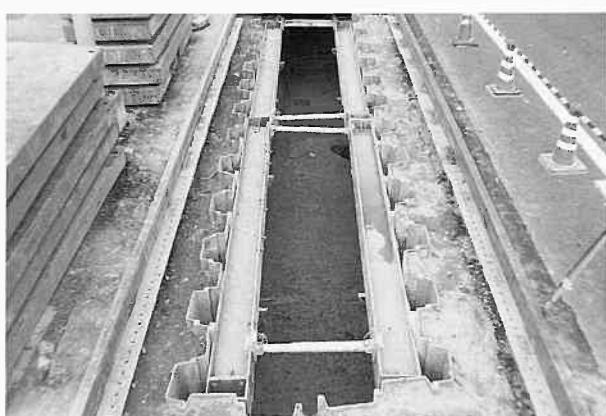
1. AW37南区 客土除去面状況(南から)



2. AW37南区 噴砂跡検出状況(1)(東から)



3. AW37南区 噴砂跡検出状況(2)(東から)



4. AW37南区 掘下後(南から)



5. AW37南区 SK-01断面(西から)



6. AW37南区 西壁断面(南東から)



7. AW29北区 第1構造面検出状況(北から)



8. AW29北区 P-01(東から)



1. AW29北区 P-02断面(東から)



2. AW29北区 P-03断面(西から)



3. AW29北区 P-04断面(西から)



4. AW29北区 第1遺構面遺物出土状況(西から)



5. AW29北区 掘下後(北から)



6. AW29北区 第1遺構面下遺物出土状況(1)(南から)

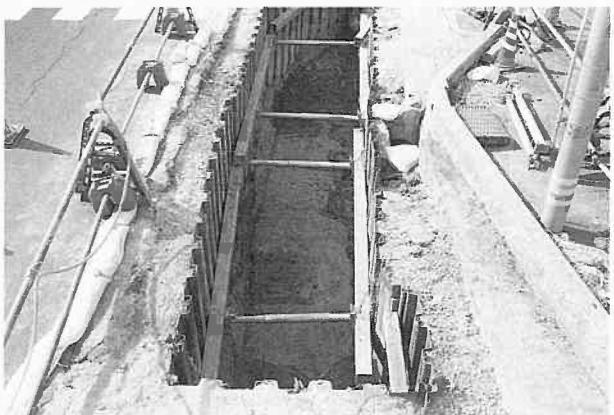


7. AW29北区 第1遺構面下遺物出土状況(2)(西から)

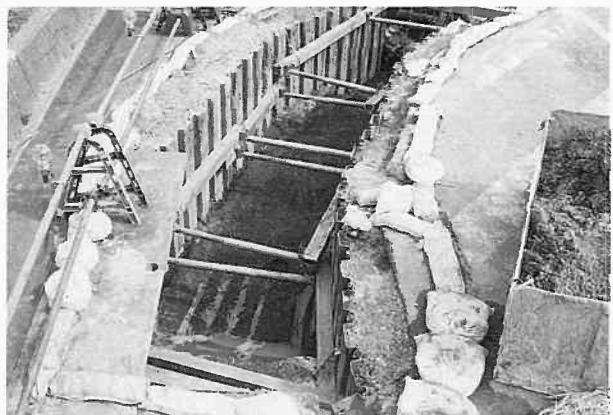


8. AW29北区 南壁断面(北から)

PL. 10



1. AE22南区 第1遺構面(客土除去面)検出状況(南から)



2. AE22南区 第1遺構面(客土除去面)検出状況(北から)



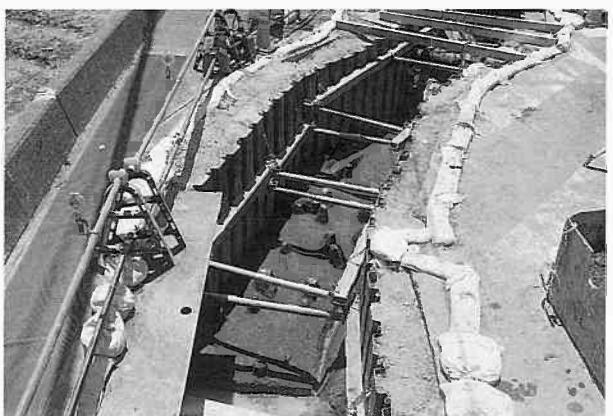
3. AE22南区 SK-01断面(南から)



4. AE22南区 SK-01(西から)



5. AE22南区 P-01断面(南から)



6. AE22南区 第1遺構面下遺物出土状況(北から)



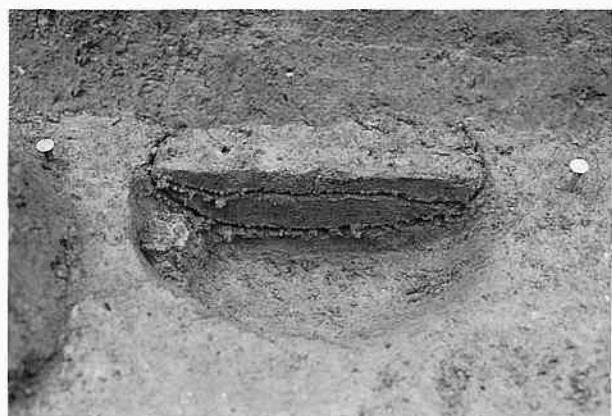
7. AE22南区 SK-02断面(南から)



8. AE22南区 SK-02(西から)



1. AE22南区 P-02断面(北東から)



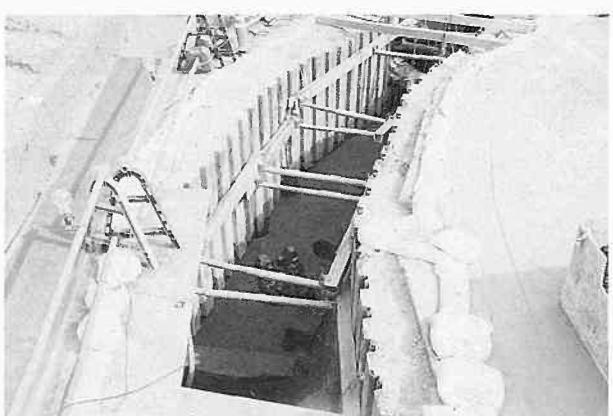
2. AE22南区 P-03断面(東から)



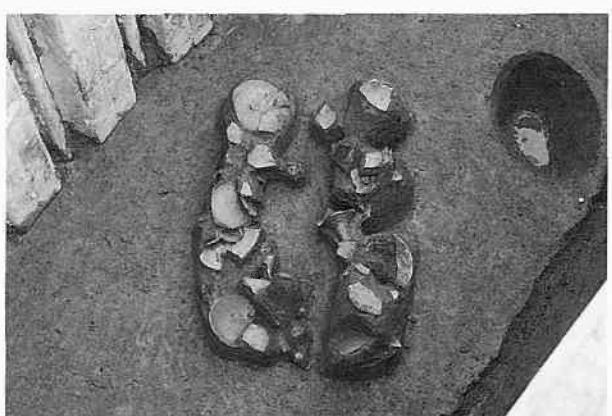
3. AE22南区 P-04断面(南西から)



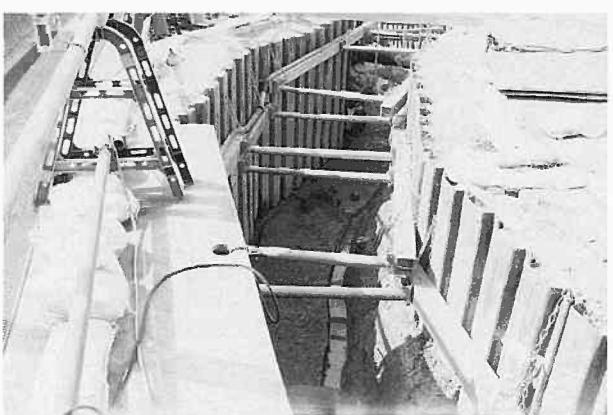
4. AE22南区 P-05断面(南から)



5. AE22南区 第2遺構面検出状況(北から)



6. AE22南区 第1遺構面下遺物出土状況(北西から)

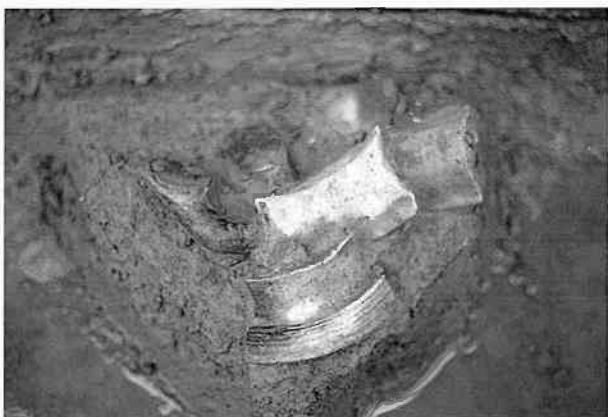


7. AE22南区 堀下後(北北東から)



8. AE22南区 堀下後遺物出土状況(1)(東から)

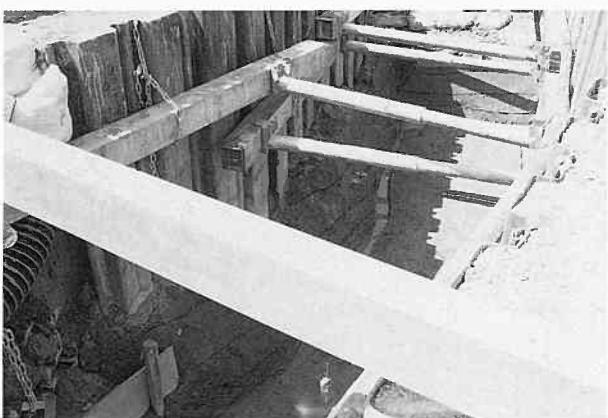
PL. 12



1. AE22南区 掘下後遺物出土状況(2)(東から)



2. AE22南区 西壁断面(1)(南東から)



3. AE22南区 西壁断面(2)(南東から)



4. AE22南区 北壁断面(南から)



5. AW28南区 掘下状況(南南東から)



6. AW28南区 掘下状況(北北西から)



7. AW28南区 西壁断面(南東から)



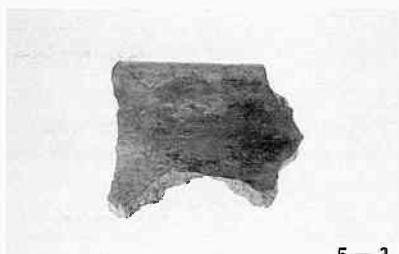
8. AW28南区 東西中央ベルト断面(南南東から)



5-1



5-2

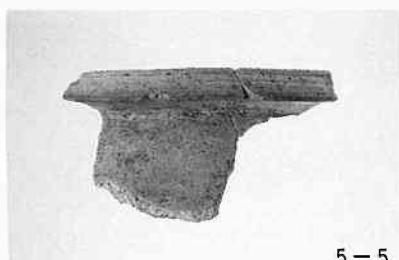


5-3

① AW28区 出土遺物(第5図-1～5、7、9)



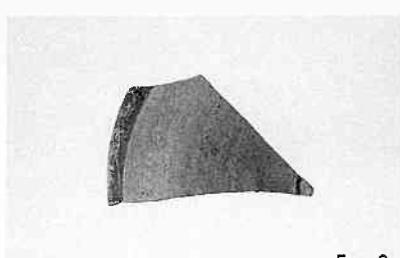
5-4



5-5



5-7



5-9

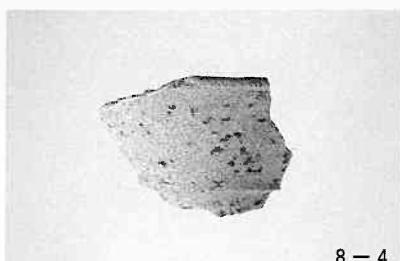


8-2



8-3

② AW29区 出土遺物(第8図-2～7)



8-4



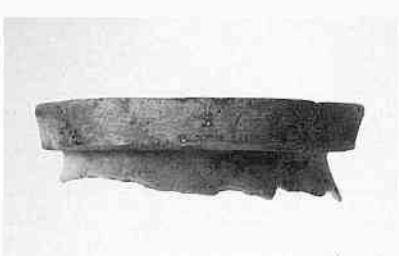
8-5



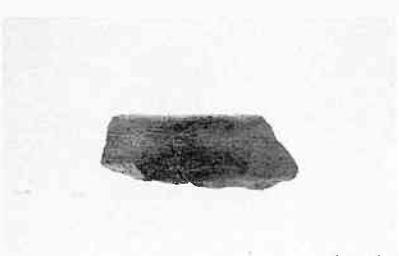
8-6



8-7



9-1

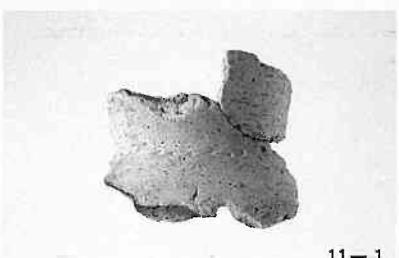


9-2

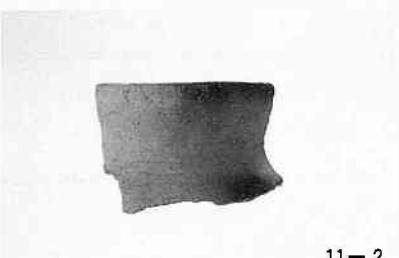
③ AW33区 出土遺物(第9図-1～3)



9-3



11-1

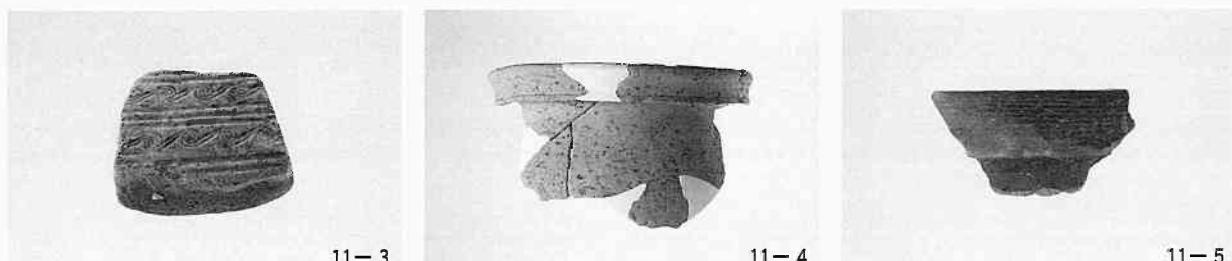


11-2

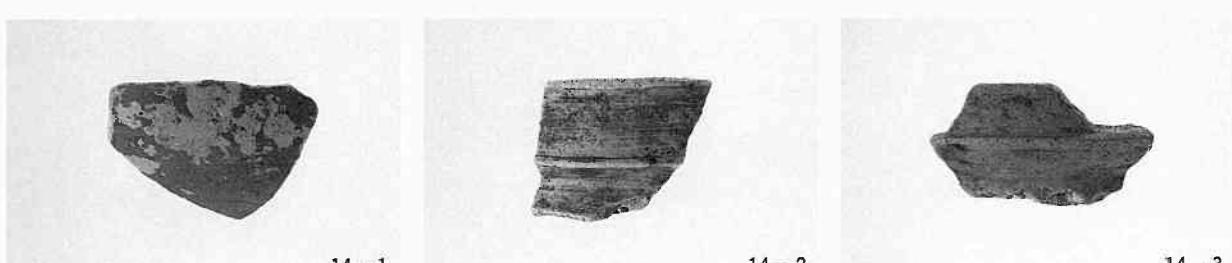
④ AW37区 出土遺物(1)(第11図-1、2)

調査地内出土遺物(1)

PL. 14



①AW37区 出土遺物(2)(第11図-3~8)



②AW28北区 出土遺物(第14図-1~4)



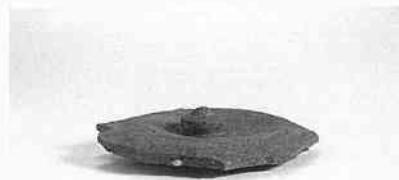
③AW29南区 出土遺物(1)(第18図-1~3、5~8、10)



調査地内出土遺物(2)



18-11



18-12

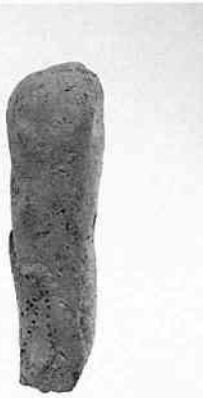
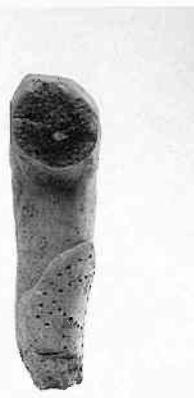


18-13

① AW29南区 出土遺物(2)(第18図-11~14)



18-14



21-1



21-2



21-4

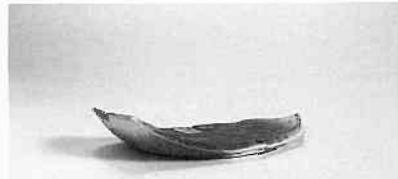
② AW29北区 出土遺物(第21図-1、2、4~9)



21-5



21-6



21-7



21-8



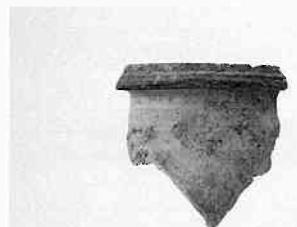
21-9

調査地内出土遺物(3)

PL. 16



23-1



23-2



23-3

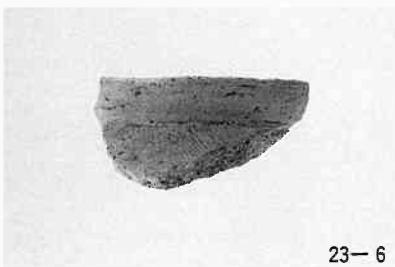
①AE22南区 出土遺物(第23図-1~12)



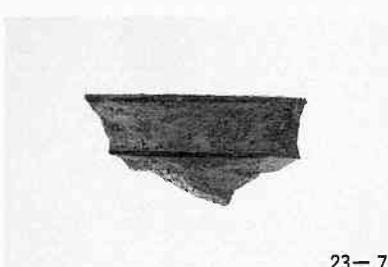
23-4



23-5



23-6



23-7



23-8



23-9



23-10



23-11



23-12



25-1



25-5



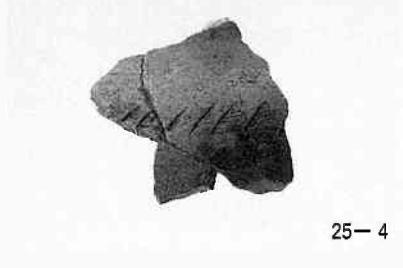
25-2

②AE29地点 出土遺物(第25図-1、5)

③AE24地点 出土遺物(第25図-2~4)



25-3



25-4

調査地内出土遺物(4)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あきさといせき							
書名	秋里遺跡							
副書名	一般国道53号秋里電線共同溝に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田真宏							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0197 鳥取県鳥取市国府町町屋305-1 Tel.(0857)23-2410							
発行年月日	西暦2008年(平成20年)3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
秋里遺跡	鳥取市秋里 字敷ヶ土手、 三嶋、村之下	市町村	遺跡番号	35° 31' 12"	134° 13' 0"	20060821～ 20061031 20070524～ 20070528 20080115～ 20080118	191.02	国道53号秋里電線共同溝工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
秋里遺跡	集落跡	弥生時代後期から 奈良・平安時代		土坑 溝状遺構 ピット状遺構 土器溜 噴砂跡	弥生土器 土師器 埴輪片 須恵器 石器 鉄器			

秋 里 遺 跡

一般国道53号秋里電線共同溝に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月27日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団
印刷所 勝美印刷株式会社
